
クサナギ

ZARUSOBA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クサナギ

【Nコード】

N0215D

【作者名】

ZARUSOBA

【あらすじ】

ここは見知らぬ辺境の星「クリシュナ」ここでは人々が自由気ままに過ごしていた。仕事に精を出す者、日々寝て過ごす者。あらゆる意味で自由な星であった。しかし、その自由気ままなルールが災いし、この星では様々な問題が増えていった。貧富の差の拡大。犯罪の増加。歯止めがきかない負の連鎖。そんな中、一人の男と一人の少女の姿があった。あまりに不釣り合いな二人。彼等の行くところ、スリルあり、ドラマあり、安息なし。そんな彼等の物語。

プロローグ

暗い闇に映える丸い月。
あたりは眠っているように静か。
そんな夜の街で悲劇は起こった。

「うあ……うわあああ！」

突然の悲痛な叫び声。

少年はその場でのた打ち回る。

それもその筈、彼の右目からはおびただしい血が流れていた。
必死にそれを押さえる少年。

激しい痛みが彼を襲う。

だが、それ以上に目の前で起こった惨劇の怒りの方が大きかった。
少年の前には物言わぬ亡骸が二つ。

一つは見る影も無いほどにズタズタに全身を切り刻まれていた。
手足、胴体、頭。全てが原型を留めていない。

もう一つは、「誰か」が持ち上げ、死んでいるのにも関わらず、
未だ長い刀を抜いたり刺したりを繰り返していた。
この「誰か」こそがこの惨劇を起こした張本人だ。

そして、気が済んだのか、それとも飽きたのか、
持ち上げていた死体を放り投げた。

そして、少年の方へと足を運ぶ。

手には2mはあるのではないかと言う刀。

惨劇を起こした刀を引きずりながら少年の目の前に立ちふさがった。

「よう、少年。お前、俺が憎い？」

返り血で真っ赤に染まった口がケタケタと笑う。

本来なら、その顔を見るだけで人は恐怖で何も言えなくなる。

だが、少年は恐怖以上に、怒りがまさっていた。

「憎いに決まっているだろ！ 殺す！ 貴様は絶対に殺してやる！
俺の父さんと母さんをよくもー！」

殺人鬼に殴りかかる少年。

だが、実力差は圧倒的であった。

少年の拳をかわすと同時に腹部に膝を入れる殺人鬼。

少年の怒りも虚しく、腹部を押さえてそのまま崩れ落ちる。

そして、殺人鬼は少年の髪を乱暴に掴み、顔を正面から向かい合う。

「いいね、少年。気に入ったよ。その無謀さに免じて、
君は見逃してやろう」

殺人鬼の気まぐれ。

少年が抵抗したのがよほど嬉しかったのか、顔の表情が緩む。

髪を掴んでいた手を離し、そのままゆっくりと少年の下を去る。

そして、最後に殺人鬼は捨て台詞を残していった。

「俺を殺したいのなら頑張れよ？ 今日から復讐の始まりだな。
楽しみにしてるぜ？ 少年」

そういつて顔だけ少年の方に振り返る。

少年は意識を失う前に殺人鬼の赤い瞳だけが印象に残っていた。

第一章 『クサナギとユイ』

ここは見知らぬ辺境の星「クリシュナ」

ここでは人々が自由気ままに過ごしていた。

仕事に精を出す者、日々寝て過ごす者。

色んな意味で自由な星であった。

しかし、その自由気ままなルールが災いし、この星では犯罪が年々増えていった。

この町「ウエスタンス」もその影響を受けている。

昔は鉱石の発掘で栄えたこの町も、今では見る影も無い。

人を迎えるはずの町の入り口はカタカタと看板が揺れていた。

町の中は砂埃をあげる風が虚しく吹いていた。

西部劇を思わせる木造の家が立ち並ぶ。

唯一、町の酒場からは昼間だと言うのに、人の声が絶え間なく聞こえていた。

酒場の中は薄暗く、天井には換気の為と思われる羽がゆっくりと回り続けていた。

そして、いくつもの丸テーブルに拳銃を携帯しているウエスタン風のゴロツキが何人もたむろっていた。

この酒場ではこれが日常茶飯事。

しかし、今日だけは違っていた。

「いらつしゃ……」

酒場の扉が振り子のように開く。

扉の開く音で、酒場のマスターは挨拶をした。

何時ものゴロツキかと思って客の顔を見ると、

そこには黒い服の男と10代前半の少女が立っていた。

黒い服の男は、見かけからして、歳は20代前半。

ボサボサの黒い髪に黒いサングラス。

身長は180cmほどで、体格はやや筋肉質。

黒い長袖のシャツの上に黒のジャケットを羽織っていた。

下は灰色の長ズボン。

そして、その隣の少女は、髪は白く真珠のように輝いており、目は深い蒼い色。

顔立ちは理想的な卵型。表情は氷のように涼しげで、身長は黒服の男の胸辺りといったところだ。

彼女は、自分よりもひと回り大きいトランクを後ろに引いていた。片手とトランクをがんじがらめの鎖で繋いでいる。分厚く、銀色のステンレス製のまるで金庫のようなトランクだった。それを苦も無く持ち歩く少女。

「ちわーす。申し訳ないんですが、飲み物とか頂けると非常に助かるんですが……」

容姿とは裏腹に陽気な声で喋る黒い服の男。

黒服はキョロキョロと辺りを見回し、空いている席がカウンターしかないと分かると、あっさりカウンターに座った。

「すみません、酒とミルク。ジョッキで」

注文と同時に金を出す黒服。

それを見た50代半ばの白髪交じりのマスターは
渋々注文を受ける。

マスターは後ろの酒棚から酒を取り出し、冷蔵庫から
ミルクを取り出す。

「はいよ」

二人の前に出されるミルクと酒。

そして、それを二人は一気に飲み干した。

「ちよっ!？　ちよっとお客さん！　何してるんですか！」
「ん？　金は払っただろ？」

おかしいな？　と首をかしげる黒服。

だが、酒場のマスターが驚いているのはそこではない。
なぜなら、黒服の男がジョッキでミルクを飲んでおり、
そして、あろう事か少女がジョッキで酒を飲んでいたのだ。

「困りますよ、こんな子供に酒を」

「まあ、硬い事言わない。お金は払ってるんだから、ね？
後何か食べ物ない？　あつたら欲しいんだけど」

黒服のいい加減さに呆れつつも、渋々言う事を聞くマスター。
マスターはサンドイッチを黒服の前に出す。

「お客さん、随分と大きな荷物をお持ちですね？」

マスターがチラリと少女のトランクに目をやる。
確かに、旅行用にしてはサイズが大きすぎる。

気になるのも無理は無い。だが、マスターがそんな質問をしたのはもう一つ別の理由がある。

周りにいるゴロツキが目でマスターに合図を送っていた。

もし、中身が武器などであればそれ相応の『対応』を取らなければいけない。

「あれ？ マスター気になるの？」

「え、ええ……」

そんな事とは露知らず、黒服は聞かれてニヤニヤと笑う。

「見たいんだったら、見せましょうか？」

「えっ？ いいんですか？ お客様」

「まあ、見せて減るようなものじゃないですから。おい『ユイ』

良かったら見せてやってくれないか？」

ユイと呼ばれた少女は、黒服の声に無言で頷く。

そして、おもむろにトランクの鍵を開ける。

蓋と呼ぶには大きすぎる。まるで扉のようだ。

そして、トランクの扉が開かれた。

中からは、何かの機械のパーツらしきものがぎっしりと整理整頓され、

保管されていた。

その数は数え切れないほどだった。

「これは、なんですか？」

「まあ、見ての通り機械のスクラップだよ。こいつが結構な金になるんだ。」

少しでも量を増やしたいから
こういう大きなトランクを運んでるって訳」

フフンと、微かに笑う黒服の男。

それを見たゴロツキとマスターはほっと胸を撫で下ろす。

そして、何事も無かったかのようにゴロツキ達は再び仲間内で雑談をし始めた。

「お客さん、言っちゃ何ですが早くここから出て行つたほうがいいですよ？」

布でグラスを磨きながら、周りに聞こえないような声でポツリと話すマスター。

その言葉を聞いた黒服の男と、少女はキョトンとしていた。

「えっ？ 何で？」

「ここいらは、「賊」に支配されているんですよ」「賊？」

「ええ……数年前に突然、『チキンタッカー』と呼ばれる悪党がこの町を根城にしちまいまして、ほら、後ろのゴロツキ共がタッカーの部下ですよ。それからというものの、タッカーの野郎は私たちに膨大な金を要求してきてるんですよ」

酒場のマスターが暗い影を落とす。

「あらら、そりゃ災難ですな。だったら抵抗なり、逃げ出すなりすればいいじゃないですか？」

黒服はサンドイッチをほおびりながらマスターに問いかける。
所詮は人事と思ってか、その声からは同情の余地などひとつかけらも

見当たらない。

「できるならやってますよ。チキンの奴は用意周到の奴でして、この周辺の国境は全てあいつの息が掛かってましてね、逃げ出すのも

不可能。抵抗しようにも、凄腕の銃使いがいるんで歯が立たないって

わけですよ」

八方ふさがりと言った様子のマスター。

話しているうちにマスターはどんどん暗くなっていった。その様子を見た黒服と少女は、結構な厄介事と見たのか。

「なるほど、それじゃあ俺達も早くここから出て行ったほうがいいですね。うん、有益な情報をありがとうございます。まあ、悲しいですが、これからも頑張ってくださいね」

などと、慰めにもならない言葉を残して立ち去ろうとする。些が残ったサンドイッチが黒服は気になりつつも、厄介事に巻き込まれるよりはと、出ようとしたその時。

第一章 『クサナギとユイ』 2

外から車の音が聞こえてきた。

車は酒場の前で止まり、罵りあう声が聞こえる。

そして、扉から身体を縄で縛られた女性が勢い良く入ってくる。

女性は見た目は20代前半。

ショートヘアで茶髪。赤い縁の眼鏡ふちをかけていた。

眼鏡の奥では透き通るような黒い瞳。

白いシャツに灰色のベストを着こなし、青のジーンズを着ていた。
スタイル、容姿共に中々のものであった。

突然の来訪者にゴロツキどもが騒ぎだす。

女性の後ろから、いかにも悪そうなゴロツキが2、3人
入って来た。

「ジョンの兄貴！ どうしたんですか、この女は？」

酒場の中の一人のゴロツキが女性の後ろから入って来た
リーダー格の男に話しかける。

ジョンと呼ばれた男は倒れていた女性を持ち上げる。

「この女がな、隣町の警備隊に俺達の事を話そうとしてたんだ。
間一髪、こうして犯人を取り押さえたってわけだ」

ジョンの言葉に酒場のゴロツキから拍手や口笛が飛ぶ。

まるで、英雄を称えるかのような雰囲気。

だが、女性は男をキッと睨みつける。

「ふざけないで！ 貴方達がやっている事は許されることじゃないわ！

何が犯人よ！ うぬぼれるのもいい加減にしなさい！」

女性の怒鳴り声にジョンは腹が立つたのか、思いつきり女性の頬を平手打ちする。

酒場に鋭い音が響き渡る。

女性の頬はみるみる赤く染まっていく。

だが、彼女の目はそんな暴力に屈する事無くゴロツキを睨みつけていた。

そんな態度に出る彼女にジョンは苛立つ。

「おもしれえ、だつたら遊んでやるよ」

ジョンは彼女を酒場の中央に放り投げる。

周りのテーブルに居たゴロツキどもが彼女を中心に円を囲む。

その数、8人ほど。

そして、ジョンと一緒に入って来たゴロツキが二人。

計11人が彼女を取り囲んでいた。

全員がいやらしい笑みを浮かべる。

「よかつたなあ、姉ちゃん。死ぬ前に俺達が遊んでやるんだから」

ゴロツキどもの態度にさすがの女性も恐怖したのか、肩がガタガタと震えているのが見て取れる。

そして、彼女にゴロツキ共が女性に一齐に手を伸ばそうとした瞬間。

「あゝ、お取り込みの最中にちよつといいですか？」

突然の声にピタリとゴロツキ達の手が止まる。
その声の主は黒服の男だった。

「何だ、てめえは？」

一人のゴロツキが銃を抜いて黒服に向ける。
それを見た黒服は降参、無抵抗と両手を万歳して
意思表示をする。

「えっ？ 私ですか？ 私の名前は『クサナギ』です」

クサナギと呼ぶ黒服はゴロツキ達と僅かに距離を置いて
万歳の姿勢で話しかける。

「もし、良かったらその人助けてあげませんかね？」
「はあ？ てめえは馬鹿か？ 助けれるわけねえだろ！？」
そこで俺達がしてる所でも見てな」

下品な笑い声が酒場に響く。
はあ、と呆れた声でクサナギはため息をついた。

「いや、俺は別にその女性がどうなってもいいんですが、
ユイの奴がお願いしてくるものですから、どうか何卒
よろしくお願いします」

そついうと、頭を深々と下げるクサナギ。
その言葉にペツと地面につばを吐くゴロツキ。

「嫌だね。この女もこうなる運命だったって訳だ。」

分かったか？ てめえも無駄なんだよ。力の無い奴が出しゃばるな」

再び下品な笑い声が酒場に響く。

だがこの時、彼等は気づくべきだった。

彼の逆鱗に触れていたという事に。

「……なるほど、確かにおっしやる通りだ。力の無い奴には何も出来ない。人を助ける事も、自分を守る事も」

「あん？」

「お楽しみの最中を妨げて申し訳ありません。お詫びと言っては何ですが、貴方達に一番高い酒をご馳走させてもらえないでしょうか？」

突然、裏を返したような態度を取るクサナギ。

だが、酒と言う言葉にゴロツキどもは騒ぎ立つ。

「ユイ、彼らに『一番』をプレゼントしたいんだが？ いいか？」

クサナギはユイの方を振り返る事無く背中越しに喋る。

ユイはクサナギの言葉に、微かに笑みを浮かべる。

「『一番』……でいいのよね？ クサナギ？」

初めて喋るユイ。

その声は涼しげで凜としていた。

「勿論だ。早くしてくれよ？ 彼等を待たせては失礼だ」
「なんだよ、てめえ、結構いい所あるんじゃないか」

ゴロツキどもは浮かれていた。

しかし、それも一瞬のものだとは彼らには知る由も無い。

「ん？ あれは……警備兵じゃないですか？」

「！？ 何！？」

窓の方を覗きながら喋るクサナギ。

警備兵と言う言葉にゴロツキどもが一斉に窓の方を見る。

無理も無い、先ほどのジョンの言葉が耳に入っていれば警戒するのは当然だ。

だが、それはクサナギによる嘘^{フリップ}

しかし、この状況で嘘など喋れる人間がいるだろうか？

目の前には10人を超える人数が拳銃を所持している。

その状況もあり、自然と全員が窓の外を見ていた。

時間にして僅か2秒足らず。

だが、彼にとっては充分すぎる時間であった。

ゴロツキが窓の外を向くのと同時に静寂を破る音が二回。
その音でゴロツキどもはハッと我に返る。

だが、時既に遅し。

中央に居たはずの女は居なくなり、近くにはこめかみに
大きな風穴が開いたゴロツキが二体。

クサナギのほうを見ると、彼の片腕には先ほどの女性が
抱きかかえられ、そして、もう片方には何時の間にか
大型の真っ赤な拳銃が握られていた。

45口径で大型の自動拳銃^{オートマチック}

普通の物に比べて大きさが一回り大きい。

明らかに量産品ではないオリジナル。

血に染まったような紅いボディに、まるで銃自体が鎧を着ているかのような装飾と重厚感。

音の正体と思われる銃口からは煙が出ていた。

「えっ？」

驚きの声は女性からだった。

彼女自身、何時クサナギによって助けられたか分からなかった。気づいた時には既にクサナギの腕に抱かれていた。

あまりに一瞬の出来事。

「て、てめえ！ よくも！」

ゴロツキの怒りの矛先がクサナギに向く。

残りのゴロツキが一斉に腰のホルスターの銃に手を掛けようとする。しかし、既にクサナギは次の行動に移っていた。

銃を水平にし体を独楽こまの様に回転させ、

流れるような動きで正確にゴロツキの額に弾丸をぶち込む。

その数なんと三人。

そして、その回転の勢いで女性をカウンターの方に投げ飛ばす。

「きゃあああああ！」

悲鳴をあげながら、カウンターの酒棚にぶつかる。

派手に酒瓶が割れる音と共に女性はカウンターの奥に倒れる。

クサナギとユイもカウンターの奥へと隠れる。

彼らが隠れたと同時に銃声が飛び交う。

絶え間ない銃弾がクサナギ達に襲い掛かる。

何とかカウンターの影に隠れてやり過ごしているものの状況は非常に劣勢。

向こうは手練れがまだ6人もいるのに比べて、こちらは戦えるのがクサナギ一人。

そんな絶望的な状況にした張本人は。

「いや、楽しくなってきたね」

全く気にしてなかった。

それどころか、この状況を楽しんでいる様子。

「な、なんでこんな状況で笑っていられるのよ!」

そんなクサナギを見て驚く女性。

「……クサナギは、壊れてるから」

ユイが呆れた表情で喋る。

それもその筈、クサナギを見ればこの状況にも関わらず、カウンターの上面にあった残り物のサンドイッチを頬張っていた。ユイの言っていた事もまんざら嘘ではないようだ。

一向に止む気配が無い敵の銃声。

もし、このまま長丁場になればゴロツキの仲間が異変を感じて駆けつけるだろう。

時間が経てば経つほどクサナギ達にとっては不利。クサナギは何を思ったのか、ユイに拳銃を手渡す。

「ユイ、『三番』だ」

「三番? 敵が多いのに三番? 『二番』の方がいいんじゃないの」

？」

「二番は駄目だ。物陰に隠れてる奴らに二番じゃあ役不足だ。三番にしておいてくれ」

傍から聞けば何の事だかさっぱり分からない会話。

ユイはクサナギの言葉に頷くと、金庫のようなトランクの蓋を開ける。

「……あ」

「ん？ どうしたユイ？ 何かあったのか？」

「タイム……計ってくれないと」

「お前、こんな時でもこだわるのか？」

「クサナギの精神に比べればまだまし」

クサナギはユイの言葉に苦笑いをしながら、ズボンのポケットの中からストップウォッチを取り出す。

「あなた達、何してるの？」

クサナギ達の奇妙な行動に興味を持ったのか、女性がクサナギに話しかける。

それを見たクサナギは何を思いついたのか、女性の縄をほどく。

「あんた、名前は？」

「えっ？ わ、私は『アイリーン』よ」

「じゃあ、これはアイちゃんに任せるわ」

「えっ？」

そういつてクサナギはアイリーンにストップウォッチを渡す。何がなんだか分からないといった様子のアイリーン。

「じゃあ、ユイ。準備はいいか？」

クサナギの言葉にコクリと頷くユイ。

「それじゃあ、スタート！」

瞬間、目を疑う光景が広がる。

それを見ていたアイリーンは言葉を失った。

ユイの手が動いたと思ったら、持っていた拳銃があつという間にパーツに解体されていく。

リズム良く、そして華麗に。

その指の動きはさながらピアノの演奏のようだ。

そして、トランクの中にあつたパーツを素早く取り出す。

解体した拳銃のパーツとトランクの中のパーツが

ジグソーパズルのように組み合わせられていく。

「……………おわった」

ユイの言葉が出た時には手の中にあつた拳銃は姿を変えていた。

先程の2倍ほどの銃身に、大口径。

パーソナルカラーと思われる紅色だけはそのまま。

スライドの役割はポンプアクションに変更され、その一撃は

至近距離ならば大口径ライフルに匹敵するといわれる銃。

「ショットガン散弾銃」へと変わっていた。

変更するにかかった時間はおおよそ2秒。

人間離れた芸当を年端もいかぬ少女が見せつけた。

その光景を目の当たりにして口が開いたままのアイリーン。

「いくら？」

「えっ？」

「何秒かった？」

「あっ！ えつと……その、5秒……」

その言葉にユイは頬を膨らませる。

無理も無い。彼女は今まで『3秒より後れた事が無いからだ』

明らかにアイリーンがストップウォッチを止めるのが遅かった。

「良かったな、『最低』記録更新おめでとう」

ヒーヒーと腹を抱えて笑うクサナギ。

むすつとした表情でユイはクサナギに散弾銃を投げ渡す。

クサナギは受け取ると素早く銃をチェックする。

「ユイ、『スラッグ』をくれ」

「スラッグ？ 散弾じゃないよ？」

「いいんだよ。相手さんは物陰に隠れているからそれごと「撃ち抜く」」

幸い、距離の方は心配しなくて良さそうだ」

散弾銃には二種類の弾がある。

「散弾」と「単発弾」の二種類だ。

「散弾」はシエルと呼ばれるケースの中に小さな弾丸が封入されており、

発射する事で中の小さな弾丸が放射状に広がる弾の事。

「単発弾」は文字通り一発の弾体を発射する弾の事。

これを『スラッグ弾』と呼ぶ。

この単発弾は散弾と比べて遥かに威力が高く、障害物を破壊する目的でも

使われる。だが、その反面、距離があると威力が落ちる。

クサナギは手馴れた手つきで弾を込めていく。

準備は整った。

だが、撃つタイミングが見当たらない。

一瞬でも顔を出せばたちまち蜂の巣になる状況。

クサナギはキヨロキヨロと辺りを見回すと、冷蔵庫の中から手のひらサイズの深緑色の野菜を取り出した。

そして、それをゴロツキ達に向けて投げた。

勢い良く音を立てて地面に落ちる野菜。

紛れもなく野菜だ。

しかし、遠くから見ていたゴロツキ達はそれは「爆弾」に見えた。

こんな状況でまさか野菜を投げつけてくるなどという

発想はまず無い。

形と大きさも手榴弾に近かったことも重なり、ゴロツキ達は慌てて物陰に身を潜める。

その瞬間、クサナギはカウンターから身を出す。

瞬時にゴロツキたちの位置を確認。

散弾銃を構え発砲する。

テーブルの影に隠れていたゴロツキをテーブルごとぶち抜く。豪快な音が酒場に響き渡り、同時に人が跳ねる。

これで一人。

だが、散弾銃は連発するのには不向き。

一回撃つと、リロードを行わないといけない。
騙されたと分かったゴロツキはすぐさま反撃の態勢に出る。
しかし、信じられない光景を彼らは目の当たりにする。

クサナギは撃つのと同時にグリップから手を離し、
反動を利用して、トリガーに引っ掛けてある指で銃を一回転させる。
これにより、瞬時にリロードを済ませたのだ。
そして、すぐさま発射。

これだけでも曲芸の域。
だが、クサナギはコレを高速で『三回連続』やってのけたのだ。
そのいずれもがゴロツキ達を正確に捉えていた。
もはや人間が行える業ではない。

撃たれたゴロツキが吹き飛ぶ。

残りは後二人。

リーダー格の男とその部下だ。

しかし、先程の人間離れした技を見せられて二人は
戦意喪失状態だった。

明らかに目が泳いでおり、銃を持っている腕はガチガチと震えていた。

「さてと、どうしますか？ お二人さん」

散弾銃を片手にカウンターの上に座るクサナギ。

ふあゝ、とあくびをするなど、あまりの余裕ぶり。

「く、くそっ！」

勝てぬと悟ったのか、窓を破って逃げ出すゴロツキ。
それを撃とうと思えば撃てたのにも関わらず、

黙って見送るクサナギ。
こうして戦いは終わった。

以前の酒場は見る影もなくなり、
酒場の中は血と硝煙の匂いで充満していた。

「わ、私の店が……」

ガクリと膝を落とす酒場のマスター。

一番の被害者はこのマスターかもしれない。

目の前の惨劇の後を呆然と見つめるアイリーン。

カウンターの上からひょいっと飛び降りるクサナギ。

そして、ユイに散弾銃を投げ渡す。

それをユイは一瞬でばらして、全てのパーツをトランクの中にしま
う。

クサナギは呆然としているアイリーンに近づく。

「よかったなあ、生きてて」

「えっ？ あ、助けてくれて……ありがとう」

「なーに、お礼を言うならあのトランク持つてる子に言ってくれ。

あの子がアンタを助けてほしいって言ったから助けたんだ」

ニカツと笑うクサナギ。

そして、何事も無かったかの様に酒場の入り口から出て行く。

最後にバイバイとアイリーンに向けて手を振った。

第一章 『クサナギとユイ』 3

「あつ！ 待って！」

アイリーンは慌ててクサナギ達の後を追う。

入り口を出たところで、クサナギ達は立っていた。

クサナギ達の周りには何処から沸いて出てきたのか、町の住民がクサナギ達を囲んでいた。

「あんた、何てことをしてくれたんだ！」

住民の一人が大声で怒鳴る。

そして、それに呼応するかのように周りの住民が口々に喋る。

「あんたのおかげで俺達はおしまいだよ！」

「そうよ！ あんたが何もしなければこんな事には……」

「おしまいだ！ あんたのせいで皆殺しにされちまう！」

クサナギに向けて次々と罵声を浴びせる。

それをただ黙って頷いて聞き続けるクサナギ。

そして、ある程度聞き続けた後。

「はい！ もう結構です！」

クサナギは、そう言って手を叩いて大きな音を出す。

そのあまりに大きな音は、住民を黙らせるには充分だった。

「貴方達の言い分を聞いたところ、俺が厄介事に首突っ込んだ為に、あんた達に被害が及ぶと？」

「そうだ！ どうしてくれるんだ！」

「じゃあ、あの時俺が女性を助けなければ万事解決してた？」

「ああ！ その通りだ！」

その言葉にがつくりと頭を垂れる。

そして、肩を震わせながら。

「クツクツクツ……ハアハッハハハ！」

腹を抱えて笑いだすクサナギ。

その場で地面に倒れて転げまわる。

その光景に、誰もが啞然としていた。

「おい、聞いたかユイ。こいつらの言い分」

「聞いた。まあ、仕方ないんじゃない？」

呆れた表情を見せるユイ。

それはクサナギに対して、そして、この町の住民に対してもだ。

「いや、ここまで被害者面されると迷惑だな」

「な！？ なんだと！？」

「ハッキリいつてやるよ、あんた等、逃げているだけだよ」

クサナギはその場に座り込み、住民に言葉を投げつける。

逆切れとも思えるクサナギの言葉。

否、そう思うのは住民だけである。

「あの時、俺が女性を助けなければあんた等全員が助かった

と言うのなら、それは悪い事をした。だが、実際には違っただろ？

助けなくても、結局それはその場しのぎにしかない。

本当の意味で助かったとは言わない」

「うつ……だ、だが」

「あんた等はそうやって楽な方に逃げてきたただけだ。本当に助かりたいのならあの襲われてた女性のように立ち向かうべきだ。あんたらに関しては反吐が出るぜ」

クサナギの言葉に返す言葉が無い住民。

なぜなら、全てクサナギの言ったとおりだからだ。

とはいえ、言葉で言うのは簡単だが、実際に行動を起こすのは大変なものである。

「ちよつと、あなた言いすぎよ！ 皆あなたみたいに力があれば解決しようとするわよ！」

「あれ？ アイちゃんは住民の味方なの？ こいつら、あんた見捨ててたのに？」

「味方も何も、私が勝手に行動しただけ。この人達は関係ないわ」
「ふゝん」

クサナギはスクツと立ち上がる。

そして、今度こそ立ち去ろうとした時だった。

「待って！」

「ん？」

アイリーンがクサナギ達を呼び止める。

アイリーンは、意を決してクサナギ達に自分の思いを伝えた。

「もし良かったら、貴方達でタツカーの奴を懲らしめてやれない？ 報酬も弾むから、お願い！」

「あ、アイリーンさん！？ な、何言ってるんですか！？」

住民がざわざわと騒ぎ出す。

アイリーンは真っ直ぐにクサナギ達を見つめていた。

「断る。自分たちの問題だろ？ 俺達には関係ない」

そう言つて、クサナギ達は町の出口へと歩いていく。
それを後ろから追いかけるアイリーン。

「お願い！ タッカーは今日の事を知れば、私たちに仕返しに来る
わ。」

そうなれば、さっきの酒場と同じような事になるわ！」

「知らん。俺は関係ない。それに、アンタだけだぜ？

俺に頼んでいるの」

「それはさっきあなたに暴言を吐いたからよ、頼みにくいに
決まつてるじゃない」

「それほど切羽詰まつてないって事だろ？ あんたも諦めな」

話は常に平行線。

クサナギにはこれっぽっちも助ける気は無い。

そんな態度のクサナギに、アイリーンは賭けに出た。

「……分かつたわ、私一人で何とかするわ」

「へっ？ そりゃ無茶だろ？」

「無茶でもやるしかないの、このまま黙って死ぬわけには
行かないわ」

「ふっん、無駄と分かかっていて、なお足掻くの？」

「そうよ。何もせず死ぬ事こそ本当に無駄だから少しでもあがくの
よ」

「……」

「一応、タツカーの豪邸はこの先の町の外れにあるわ」

アイリーンはある方向に指を指す。

クサナギが酒場で助けてくれたときのように、

今回も助けてくれるとアイリーンは願うしかなかった。

無論、自分勝手に無茶苦茶だという事は

アイリーン自身が一番感じている。

「それじゃあ、『またね』」

そういつてアイリーンは踵をひるがえし、町の方へと帰っていく。

それを黙って見送るクサナギ達。

そして、アイリーンの姿が完全に見えなくなった。

「ねえ、クサナギ」

「……なんだ？ ユイ」

「助けてあげるの？」

「まさか。俺はそんなに偽善じゃあない」

そういつてクサナギは肩をすくませ、軽く笑う。

しかし、いつも隣でクサナギを見てきた少女には分かっていた。

彼が、こういう時どう行動するのか。

「重なるんですよ？ 『あの時』と」

「……」

「助けてあげたらいいじゃない？ 町の人々の為じゃなくて、

あの、無力だけど必死にこの町を変えようとしている

あの人の為に」

ユイの言葉に頭をガシガシと掻きむしるクサナギ。

その仕草は、照れているのか、イラついているのか。

答えは決まっている。

そして、そんな自分が嫌になるとクサナギは思っていた。

「なあ、ユイ」

「何？」

「ちょっと、寄り道していくか」

「はいはい。……もう、馬鹿なんだから」

第一章 『クサナギとユイ』 4

木造建ての家が立ち並ぶこの町に、一軒だけ不相応な

豪邸が町の外れに存在していた。

豪邸の周りには何人もの兵士が巡回しており、そのいずれもが機関銃を携帯していた。

豪邸の中では、ソファアーにふんぞり返っている偉そうな男がいた。歳は30代。

頭はモヒカンで、頬はこけており、それが元々鋭い目つきを更に鋭くさせていた。

服は紺のジャケットを素肌の上に着ており、筋肉を見せつけるような格好であった。

この男こそ、「チキン」タツカー」その人である。

タツカーの目の前には、先程クサナギから命からがら逃げ延びた二人の部下が正座をして座っていた。

タツカーは、二人から事情を聞き、見るからに不機嫌になっていた。

「で、お前らは逃げてきたと？」

「は、はい……」

近くのテーブルにあつた酒をグイグイと飲み始めるタツカー。そして。

「この……タコがああああ！」

飲み干した酒瓶を目の前の部下に投げつける。

勢い良く目の前の部下の一人に命中する。

そして、タツカーは立ち上がり、部下の頭を掴み地面に勢い良く叩きつけた。

「十一人もいて、たった一人にやられる奴がいるか！ ええ！？」

何度も叩きつけるタツカー。

部下の顔面は額が割れて、血が吹き出ていた。
止まらないタツカーの怒り。

これ以上続ければ死ぬ一步手前ほどの時。

「そろそろ、いいんじゃないですか？ タツカーさん」

壁にもたれ掛かっていた中年の男性が話しかける。

カウボーイハットを被り、髪の毛には白と黒が入り混じっている。
目は鷹のように鋭く、口には葉巻をくわえていた。

白い髭がもみ上げ辺りまであり、それが彼の渋さを更に際立たせる。
ウェスタン風の服と、腰には彼の金色の愛銃「S & L 20」が備えられていた。

S & L 20 は、S & L 社が二十周年を記念して作った
『シングル・アクション
S A 式の拳銃』

銃口は45口径、銃身は140mmで装弾数は六発。
昔ながらのリボルバー拳銃である。

SAは、一度撃つと、再び撃鉄を倒す動作が必要となる。
故に、連射する事には向いていないが、精密射撃に特化している。
これに、S & L 社が手を加えて銃の射撃時の反動、及び、精密さに
更に磨きをかけて作り上げたものである。
人によってはこの銃で無いと撃たないと言う人もいる。

その一人がこの男、タツカーお抱えの用心棒の
「トニー＝ギャレット」である。

「と、トニー先生」

トニーに話しかけられた途端に、弱弱しくなるタツカー。
それもその筈、今の地位はトニーのおかげなのだから。

トニーの銃の腕前は一流。

何度か危ない時もあつたが、このトニーのおかげで幾度と無く
乗り越えてきたのだ。

「話を聞いていたが、こいつらだけの責任じゃなさそうだ。
相手さん……なかなかの腕前だな」

「そ、そうか」

「どうするんだ？ 俺が町に出向くのか？」

トニーの鋭い眼差しがタツカーに突き刺さる。

それは、俺に任せると言う眼差しではない。

「こんな仕事で俺を働かせるのか？」というものだ。
それを察しているタツカー。

「い、いや、俺の部下だけで何とかする。アンタにはここぞと
いう時に働いてもらう」

「……分かった」

そんなやり取りが豪邸の中で行われている最中。

豪邸の外ではぎこちない動きで物影から様子を伺う人がいた。

アイリーンである。

手には拳銃を持っており、ガタガタと震える様子が
見て取れる。

クサナギにあんなタンカを切ったものの、実際にタツカーの豪邸の前まで来てみればなんて事は無い、自分も町の住民と一緒にだと感じた。

中に入るには、豪邸の周りにたむろしている二十人ほどの部下を倒さなければならない。

奇跡でも起こらなければ到底不可能。

「何もしない」ではなく、「何もできない」だ。

結局、物影から出る事も出来ず、ただ黙って様子を伺うだけ。

「何とか……しないと」

何時タツカー達が町を襲いに来るか分からない。
意を決して物影から飛び出ようとした時。

「ムグッ!？」

後ろから誰かに口を押さえられる。
アイリーンは全く気づかなかった。

我慢していた恐怖が、一気にアイリーンに襲い掛かる。
今にも泣き出しそうな表情。
だが……。

「心配してきてみれば、やっぱりか」
「!？」

その聞き覚えのある声にアイリーンは驚きと嬉しさがこみ上がる。

後ろを振り向くと、そこにはクサナギ達が居た。
クサナギは呆れた表情。

「きて……くれたの？」

「ユイの奴が助けてあげたらうと、言ってくるものだから仕方なくな」

あゝあ、とため息をつくクサナギ。

そのクサナギの言葉に微かに笑うユイがいた。

「で？ あの家の中にいるのか？」

クサナギが豪邸を指差す。

それに頷くアイリーン。

「ユイ、一番」

ユイはトランクの中のパーツを即座に組み立て、手渡す。

先程の酒場の中で見た自動拳銃だ。

そして、銃弾をこめると。

「ほんじゃま、ちよつくら行つて来る」

「えっ？ まさか、正面から行く気じゃないわよね？」

正面にはタツカーの部下が二人。

あんなところでドンパチやれば即座に周りにたむろしている

部下が駆けつけてくるだろう。

幾らなんでも無謀すぎる。

誰もがどうやって部下の目を盗んで豪邸に忍び込もうかと考える場面においてクサナギは。

「ん？ そのまさかだよ」

「！？ まちなさい！ 無茶よ！」

「お前らはそこで俺のショーでも見物してろ」

「い、意味わかんないわよ！」

クサナギは、フラフラと酔っ払いのような足取りで正面のタツカーの部下二人に近づいていく。

「どうも」

「あん？ 何だテメエは？」

ヤッホーと気軽に話しかけるクサナギに対して、機関銃を向けるタツカーの部下。

「お暇そうですね？」

「何が言いたい？ さつさと失せろ。でなきゃ蜂の巣だぞ？」

「そういうわけには行かないんですよ、これからパーティーが始まりますから」

「パーティー？」

何の事だ？ と部下二人は互いに顔を見合わせる。

「あれ？ 聞いてないんですか？」

「知らねえよ。何時からだ？」

「今からですよ」

「あ？」

クサナギは口が三日月状に成る程の笑みを浮かべる。

そして、パーティーの開催を告げる銃声が二発響き渡る。

パーティーの参加者はおよそ二十人。

そんな数に全く動じないクサナギ。

いや、むしろ彼にとっては『少ない』ほどだ。

第一章 『クサナギとユイ』 5

「た、タツカーの頭！」^{かしら}

凄い形相で豪邸の中に入ってくるタツカーの部下。
その様子は尋常ではなかった。

「何だ！？ これから町の連中の所に行こうかという時に！」

「ば……化け物が外にいるんですよ！ お、俺達じゃあ、齒が立ち
ません！」

ガタガタと震える部下。

さすがのタツカーもその様子を見て、ただ事ではないと感じた。

「どんな化け物だ？」

「く、黒いサングラスをかけて、紅い銃を持ってる男です。し、信
じられないんですが

銃弾が当たらないんですよ！」

「黒いサングラスに紅い銃……！？」

「……どうやら、報告にあつた連中のような」

「と、トニー先生」

壁にもたれ掛かっていたトニーが口を開く。

そして、ゆっくりと壁から離れる。

彼は腰にあつた愛銃に弾丸をこめる。

「どうやら、俺の出番のようだな」

「お、お願いします先生」

タツカーの言葉に無言で返答するトニー。

トニーにとって、タツカーはただの金づる。

一度として雇い主と思ったことなどない。

タツカーの作り出したこの環境は、トニーにとって退屈なものだった。

一つの町を孤立させて、そこから金を少しづつ奪っていく。

たまに刃向かってくる奴もいたが、全てトニーに消された。

その時はまだ良かった。

今では誰も刃向かわなくなっていた。トニーにしてみれば、まるで面白くない。

強い奴と命を懸けて戦い、それに勝つ。

そんなスリルがトニーにとって一番の喜び、楽しみだ。

（この仕事でこいつとは最後にするか……）

そんな事を考えながら、彼は最後の戦場に向かった。

第一章 『クサナギとユイ』 6

銃声が鳴り響く荒野。

二十人ほどの男達が一人の黒服の男に向けて発砲していた。だが、黒服の男にとつてそれは「拍手」

その拍手に応えて踊るようにそれをかわす。

彼がひとたび踊れば、一人、また一人と倒れていく。

まるで、彼の踊りに魅了されたかの様に。

彼は二十人の観客を前に一人舞い続ける。

危険な状況にも関わらず、彼は常に笑い続けていた。

その笑顔はまるで悪魔のようにも思えた。

止まらない。止まらない。止まらない。

彼の踊りは止まる事を知らない。

それを物影から見ているアイリーンとユイ。

「あの人……イカレてるわ」

アイリーンは思っている事を自然と口にしていた。

いつ死んでもおかしくない状況で笑っていられるクサナギ。

そんなクサナギにアイリーンは怖くなっていた。

「そうね、それは正しいわ」

「えっ？」

思ってもみなかった返事。

てつきり否定すると思っていたが、肯定するユイ。

「クサナギは、もう『恐怖』を感じない身体になってるから」
「恐怖を感じない？」

「ええ。クサナギはある事件を境に、恐怖を感じないって自分で言ってた」

哀れんだ目でクサナギを見るユイ。
その姿は、どこことなく悲しそうだった。

「……聞いた話だけど、クサナギが子供の頃、突然路上で親がクサナギの目の前で惨殺されて、クサナギ自身もかなりの重傷。殺人鬼の気まぐれでクサナギは『生かされた』らしいわ」
「えっ!？」

「それから、クサナギは自分は『死んだ』と認識してる。
だから、『一度死んだ人間が死を恐れるのはどうかしてる』って言ってた」

アイリーンはユイの言葉に驚いた。

クサナギは自分は死んだ人間だと認識している。

そんな事で恐怖を消せる人間などいない。

だが、彼を見れば本当に恐怖など無いように見える。

つまり、彼にとってその事件は、それほどのトラウマ、もしくは恐怖だったのだろう。

それに比べれば彼にとって、今の殺し合いなど『遊び』に過ぎないのだろう。

「クサナギは死の恐怖を知らない。だからこそ、あの状況で笑ってられる。そういう人なの、クサナギは」

「ず、随分割り切ってるのね、ユイちゃんは」

「そうね。最初は少し驚いたけど、馴れれば意外と普通に見えてくるわ」

「最初？ あれ？ ユイちゃんは初めからあの男と一緒にじゃなかったの？」

「違うわ。クサナギと出会ったのはある理由から。それから一緒に
なっただけ」

「理由って……どんな理由？」

アイリーンはユイに尋ねた。

全く関連性がなさそうな二人。

片方は無口で無表情の白髪の少女。

もう片方は、地獄のような光景で笑みを絶やさない

黒いグラサンの悪魔。

そんな相対的な二人に、自然と興味が湧くアイリーン。

しかし、少女の口から出た言葉は意外なものだった。

「復讐」

「ふ、復讐？ それって……」

アイリーンは言葉を続けようとした時、ふと周りが
静まり返ったのにアイリーンは気づく。

すかさずクサナギの方に視線を向ける。

そこには、たった一人紅い銃を持った男が立っていた。

そしてそれは、彼のショートタイムが終わった事を意味する。

クサナギの足元には屍の山が築きあがっていた。

クサナギは指を銃の引き金に引っ掛けてクルクルと回して遊んでいた。
た。

「さてと、それじゃあ、お山の大将とご対面といきますか？」

そして、アイリーン達の場所まで戻ろうとした時、

どこからか拍手の音が聞こえてくる。

それはどうやら豪邸の方向から聞こえてきていた。

誰かがクサナギ達に近づいてくる。

「いや、たいした腕だ。見ててホレボレしちゃったよ」

渋い声が静まり返っていた荒野に響き渡る。
そして、その声の主が姿を現した。

「！？」と、トニー「ギャレット！」

アイリーンが青ざめた表情をする。

彼女にとってこの男は、一番最悪な男だろう。
タッカーと同じく、町を滅茶苦茶にした張本人の一人。

「何だ？ アイちゃん知り合い？」

「気をつけて、こいつはタッカーの凄腕の用心棒よ」

クサナギとトニーが正面に向き合って対峙する。

二人の間に重い空気が流れる。

「しかし、随分と遅い登場だな？ お仲間さん、皆あの世に出かけちゃったぜ？」

「何、あんなのは前座だ。真打ちつてのは遅れて出てくるものだろう？」

トニーの言葉に、成る程、と頷くクサナギ。

そんなクサナギの無防備な様子を尻目に、口に葉巻をくわえ、火をつけるトニー。

そして、一服した後。

「なあ、お互い武器が銃だ。ここは一つ昔風な決着をつけないか？」

「昔風？」

「ルールは簡単だ。お互い、腰に銃を構えて俺がコインを弾く。そして、コインが地面に着いたと同時に相手を撃つ。」

『早撃ち勝負』だ」

トニーの提案に、少し戸惑うクサナギ。

だが、あまり深く考えない事にしたのか、すぐさまオツケーと指で丸を作る。

そして、互いに十メートルほど距離を置く。

「いやはや、意外だね、ポニーさん」

「……トニーだ。何がだ？」

「だってね、さっきまで俺の戦いを見てたんだろ？ だったら、

二十人を相手にしている時に、俺を背後から撃った方が早かったんじゃないの？」

「残念だが、俺は紳士ジェントルマンだからな。卑怯な事は嫌いなんだよ」

否。実はそうではない。

トニーと言う男は性根の腐っている男だが、腕は確か。

彼がここまでのし上がったのには、二つの才能があるからだ。

一つは『銃の腕前』、そしてもう一つは『相手の技量を計る目』だ。

彼はクサナギの戦い方、癖、弱点を二十人のタツカーの部下を駒に指し計っていた。

そして、彼が出した結論は過酷なものであった。

運動量は常人の域を逸脱している。

クサナギが放つ銃弾は一撃の下に手下をほおむる。

一発たりともクサナギは無駄弾を使っていなかった。

どの角度から放たれた銃弾も、あたかも『視えている』かのような動きで避わす。

故に、トニーは二十人の部下を捨て駒にした。
例え、この時にトニーが加わったところで結果は見えていたからだ。
ならば、少しでも勝率の高い手段を取る。

トニーは策を張り巡らせた。

まず、二十人の部下が死んだところでのうのうと
拍手をしながら出てくる。

これにより、クサナギの警戒心、戦意を削ぐ。

更に、近づくことにより自分の有効射程に敵を入れる。

トニーの銃は連射には向いていない。

故に一撃勝負が望ましい。

それが『早撃ちなら尚更良い』

元々、彼の得意分野は『早撃ち』

彼の人生の中で一度たりともこの分野で負けた事は無い。

クサナギが早撃ちを承諾した時点で、彼は8割方
勝ったとふんでいた。

クサナギは知らず知らずの内にトニーの土俵へと足を運んでいた。

「すまないが、そのグラスを外してもらえないか？」

「はあ？　なんでだよ？」

「殺す前に相手の素顔ぐらい見たいからな」

「はっ、良く言うよ。……これでいいか？」

クサナギはサングラスを取る。

そこから、互いに違う色の瞳が出てきた。

一つは蒼く、凍てつくような瞳。

もう一つは、紅蓮のように紅く、燃えるような瞳。

サングラスの時とは違い、その表情は意外と優しそうに見えた。

「OK。すまないね、これから死ぬっていうのに」

「な〜に良いって事よ、最後の願いぐらい聞いてあげないとね」

互いに笑みがこぼれる。

それはどちらも自信に満ちた笑顔。

『俺が勝つ』どちらもそんな感じの顔だ。

トニーは腰につけてあるホルスターの銃に手を掛ける。

クサナギは腰にあるポケットに銃を突っ込み、手を添える。

そして、それを離れて見つめるアイリーンとユイ。

じきに日が沈む夕暮れ時。

これほど決闘にふさわしい舞台は無いだろう。

トニーはコイン持った手を自分の前に持つてくる。

それをじつと見つめるクサナギ。

そして、コインは弾かれた。

だが、それは真上ではない。

トニーはあるう事か、真上に弾かずに、クサナギの顔めがけて弾いたのだ！

誰もが上に弾かれると思っていた状況を逆手にとった行動。

完全に不意をつかれた状況のクサナギ。

そう、トニーは最初からまともに勝負する気などさらさら無い。

早撃ちでは負けた事が無い。

そう自負しておきながらも、彼は100%勝てる様にこのような愚行に出たのだ。

クサナギ側から見れば、コインで相手が見えない。

トニーは勝利を確信した。

普通なら確実にトニーの勝利だ。

そう、『普通の奴なら』だ。

夕暮れの荒野に銃声が鳴り響く。

一つの影が膝を折り、目の前の男に許しを乞うようにひざまづく。

「ば……馬鹿な!？」

驚きの声を上げたのはトニーだった。

彼の手に銃は無く、その代わりに手を撃ちぬかれた跡が残っていた。
トニーの銃は無残に地面に転がっていた。

そう、先程の銃声はクサナギのものだったのだ。

「いやゝ、残念でした。申し訳ないが、あんたの行動は
『視えてる』からね」

笑いながらクサナギはトニーに近づいて額に銃口をつける。
そして、笑っている顔から一気に顔つきが変わる。
その形相からは凄まじい怒りが見て取れる。

「さて、この世に言い残す言葉は無いか？」　クソ野郎」

クサナギの声がトニーを震え上がらせる。

トニーは後悔した。

タツカーの用心棒になった事、自分のしでかした事を。

「ま、まってくれ……わ、悪気はなかったんだ。
も、もう一度チャンスをくれないか？ 今度はしっかりと
コインを真上に……」

その震えるトニーの言葉にクサナギは。

「あゝ、そういえば最初に言ってなかったな？」

「な、何をだ？」

「俺、紳士ジェントルマンじゃないから、そういうの気にして
ないんだ。……じゃあな」

そして、もう一度銃声が鳴り響いた。

第一章 『クサナギとユイ』 7

「ひっひいひい!？」

あられもない姿であたふたと喚く一人の男。

それは、紛れもなくタツカーだ。

ガタガタと逃げ場の無い豪邸で必死に目の前の男から逃げようとする。

黒いサングラスに、紅い銃を片手に持っている男から。

「いや、まさか本当に鳥頭とはね、まさにチキン？」

などと、ジョークをかますクサナギ。

そして、その後ろからユイとアイリーンがついてくる。

「そ、そんな!？ と、トニーの奴は!？」

「ん？ ああ、あいつなら外でお寝んねしてるぜ？ 永遠に」

そう言つて、クサナギは手を合わせて合掌する。

タツカーの顔がみるみる青ざめていく。

「ゆ、許してください！ お願いです！ この通り！」

タツカーはその場で土下座をする。

その様子を見たクサナギは呆気に取られていた。

「だとさ？ どうするの、アイちゃん？」

「えっ？ えつと……とりあえず、私だけでは決めれないわ。

町の人達の意見も聞かないと」

「あいよ、了解しました」

クサナギはため息をついて後ろを振り向く。
その時だった。

タツカーは近くの地面に隠しておいた銃を取り出し、クサナギ
向けて発砲したのだ。

だが、信じられない光景を目にする。

クサナギはタツカーのほうを振り向かず、首を少し傾けただけで
その銃弾を避けたのだ。

だが、ほんの僅かにサングラスに掠り（かすり）、サングラスが
地面に落ちる。

「……やれやれ、今日はほんと厄日だよな」

ふう、と一息つくと、一瞬でタツカーの方に振り向き、額に
銃口を当てる。

燃えるような紅蓮の瞳と凍てつくような蒼い瞳がタツカーを睨む。
その視線は見るもの全てを殺してしまいそんな殺気に満ちていた。

「ちょっとまって！　そこまでしないでいいわ！」

アイリーンが懸命に叫ぶ。

先程のトニーの時と同じで、クサナギは怒りに身を任せている状況。
今にも引き金をひきかねない。

「関係ないね。人を騙したり、人を後ろから殺そうとする奴が俺は
だいつきらいなんでね」

そして、引き金を引こうとした瞬間。

「あ、あんた、その目はまさか……『レッド・アイ』の連中か？」

タツカーが苦し紛れともとれるその言葉に、
クサナギの顔が豹変する。

額に当てていた銃口をはずし、タツカーの胸倉を思いっきり
鷲掴みにする。

「貴様！ 何を知っている！？ 『レッド・アイ』の連中の
何を！？ 言え！」

タツカーを片手で持ち上げ、ガクガクと揺さぶる。
クサナギは鬼気迫る表情でタツカーを問い詰める。

「し、知らない！ ほ、ほんとに知らないんです！」

「嘘をつくな！ 言わなければ……！」

「クサナギ」

今にも暴れだしそうなクサナギを止めたのはユイの声だった。

針のように鋭く、冷徹さも兼ね備えたその声はクサナギを制止する。

クサナギは舌打ちをした後、タツカーを地面に落とす。

「本当に知らないのか？」

「は、はい！ ほ、本当に知らないんです！ ただ一度だけ
出会っただけです」

「どんな奴だ！？」

「あ、あんたのような紅い瞳に、長い刀をもった男だ」
「何時だ……何時会った!? 何処で!？」

再び、今にも掴みかかりそうな雰囲気で尋ねるクサナギ。

「い、一年前、『アクアレイク』って町だ」
「アクアレイク……本当だな？」

首をカクカクと縦に振るタツカー。

それを聞くと、クサナギはギリギリと歯軋りをする。

そして、踵を返して豪邸を後にしようとする。

「待つて! まだ報酬も払ってないのにどこに!？」
「報酬は要らない。あえて言うなら、今その男から貰った」

そして豪邸を後にするクサナギとユイ。

だが、入り口の所でピタリと動きが止まる。

不思議に思ったアイリーンはクサナギ達に駆け寄ると、
そこには町の住民が武器を持って豪邸に駆けつけていた。

「えっ、皆どうしたの!？」

「あ、アイリーンさん! 無事だったんですか!？」

実は、あれから皆で話し合った結果、このまま殺されるより
皆で協力して立ち向かうと、こうして駆けつけたんですが……」

住民は周りに転がっているタツカーの部下を恐る恐る
見つめる。

住民達もその現場を見て、終わってしまったのだと確信する。
そんな住民達の蜂起を見たクサナギは。

「ほゝ、あんた達もやればできるじゃないか？」

感心、感心。と、腕を組んで頷くクサナギ。

そして、その横で相槌をうつユイ。

「だ、だけど、あんた達が既に終わらせてくれたんだろ？」

俺達は何も……」

「かゝ！ 分かってないな」

あちやゝと、額に手を当てるクサナギ。

そして、住民達に指をビシッと指す。

「いいか、こうしてあんた達は立ち上がった。その心が

大切なんだよ。じゃなきゃ、また今回の様なことが起こるぜ？

その気持ちを大切に」

それじゃあ、と、立ち去ろうとするクサナギ達。

しかし、住民の一人がクサナギ達の道を塞ぐ。

「ん？ 何だ？」

「あ、あんた達は俺達の命の恩人だ。せめて、飯などの恩返しを
させてくれないか？」

なあ？ と、他の住民に賛同を呼びかける。

そして、それに頷く住民達。

クサナギはその言葉に頭をガシガシとかきむしる。

「いいんじゃない？ クサナギ」

「ユイ？」

「確かに、先を急ぎたい気持ちは分かるけど、こうして皆

お礼がしたいって言うてくれてるんだから」

「けどな……」

「それに」

「？」

「私、お腹すいた」

その言葉を聞いたクサナギは呆気に取られる。

そして、ハイハイと小さな声で返事する。

「んじゃあ、悪いんだけど、お言葉に甘えさせてもらっていいかな？」

「！ ああ！ 勿論だとも！」

住民達によつて、クサナギ達は一晩厚いもてなしを受ける。

タツカーは住民達の意向で、牢屋に入れられる事に。

もともとタツカーはトニーや部下無しでは何も出来ない小悪党。

こうして、住民達は本当の意味で助かったのだ。

住民達のお祭り騒ぎは一晩中続いた……。

そして、夜が明けた早朝。

二つの影が荒野を歩いていく姿があつた。

「ねえ、クサナギ」

「ん？ 何だユイ」

「町の人たちにお別れ言わなくて良かったの？」

「ああ。そんな必要ないしな」

ズルズルとトランクを引くユイの足が不意に止まる。
何事かと思ひユイに近づくクサナギ。

「どうした？ ユイ」

無言である方向を指差すユイ。

その方向をじつと見つめるクサナギ。

すると、煙を上げながら何か近づくのが見える。

緑色のジープ。

そして、それを操縦しているのはアイリーンだった。

アイリーンはクサナギ達に追いつくとジープを止める。

そして、軽やかにジープから降りると。

「ちょっと！ 勝手に出て行くなんて酷いじゃない！」

「ん？ 何でだ？ べつに酷くないだろ？」

「あのね……あんたまだ報酬もらってないでしょ？」

「えっ？ だからそんなのいらなんて言わなかったか？」

そのクサナギの言葉に頬を膨らませるアイリーン。

顔には青筋を立てていた。

「私もついていく」

「……何？」

「だ・か・ら、私もついていく。貴方達についていけば

何か特ダネにありつけそうだし」

「と、特ダネ？ 何言ってるんだお前は？ さっさとあの町に
戻れ」

「あれ？ 言わなかった？ 私はフリーの記者なの。元々、

あの町の住民じゃないって訳」

「な、なんだと！？」

「あそこでの事件はあれでお終い。だから貴方達についていくって
決めたわけ」

「お、お前はあの町の住民じゃないのにあんな事してたのか!？」
「勿論。どうも私、正義感が強いタイプみたいだから」

その所ヨロシク、とウィンクしてくるアイリーン。

開いた口がふさがらないクサナギ。

そして、いそいそとジープに乗り込むユイ。

「おい、ユイ！ なにその人さらいの車に乗り込んでるんだ!？」

「……歩くの疲れた」

「お…… おまえって奴はああ〜！」

「まあまあ、こうやってユイちゃんも私を認めてくれたんだし、
先を急ぐんでしょ？ だったら乗ればいいじゃない」

クサナギは納得のいかない表情。

しかし、ユイは全く動こうとしない為、助手席に渋々乗り込む。

そして、リクライニングを最大にして寝そべり、

胸ポケットから代えのサングラスを取り出し、それをかける。

「ねえ、あなたサングラス外した方がカッコいいんじゃない？」

「わかってないね〜アイちゃん。このグラスンは俺のチャーム
ポイント。これないと俺の魅力半減なのよ」

「それ、本気で思ってるの？」

「勿論」

「……クサナギはイカレてるから」

「どうせイカレてますよ」

ハハハと、いつもの自然な笑い顔がクサナギに戻る。

こうして、奇妙な三人の旅が始まった。

第二章 『白銀の義手』

辺境の星「イシュタル」ここは自由な星。

しかし近年、様々な犯罪がはびこる為に『ある組織』が設立された。その組織の名前は『ヴァンファール』

このヴァンファールは町の運営権利を明け渡す事により、その町をあらゆる犯罪から市民を守る事を保障するというものだ。

運営権利のみで、町の所有物、市民の財産、それらに手を出さない事も

約束している。

そんな好条件の為に依頼が殺到。

ヴァンファールは1年足らずで、イシュタルの半分ほどの町を手中に治めたのだった。

この『プリズムシティ』もヴァンファールによって守られている一つ。

以前の『ウエスタンス』とは違って、町は緑や水に恵まれており、人が町に溢れかえっていた。

そして、このプリズムシティの最大の特徴は、ガラス張りの高層ビルの多さにあった。

所狭しとそこら中に生えるガラス張りの高層ビル。

それらは太陽光を乱反射し、光輝く。

その様子からこの町は『プリズムシティ』と呼ばれている。

近代的な建物が多いイシュタルの都会の一つ。

町中を覗いてみれば、規則正しく立ち並ぶ店の数々。

そして、その中の一つの食事処と呼ぶより、レストランと言ったほうがぴったりな内装の飯屋で……。

「すいませ〜ん、ジャンボカレー、杏仁、イシュタル丼、それぞれおかわりお願いしまーす。あ、あとミルク。ジョッキでね」

口に食べかすをこれでもかと、いわんばかりにつけたサングラスのこの男がいた。

テーブルの上には綺麗に食べられた皿の山が出来上がっていた。それを啞然と見つめるアイリーン。

いつもの事だと割り切ってクサナギの隣でジョッキで酒を飲むユイ。

「ん？ どうした？ 食べないのかアイちゃん？」

全然箸が進んでいないアイリーンを不思議に思ったのか、口に物を入れた状態で喋るクサナギ。

「あんたのその食欲見ると食べる気も失せるわよ」

と、嫌味をたつぷりつけた声で答える。

それじゃあと、アイリーンの飯も頂くクサナギ。

その行動に呆れてものが言えないアイリーン。

「しっかし、あれだね、この町はやけに治安がいいね？」

「そりや当然よ、なんたってヴァンファールレが守っているから」
「ファンファールレ？」

「ヴァンファールレ！ アンタ知らないの！？ 超がつくほど有名な組織」

「知らん」

ユイに、知ってるか？ と顔を向けるクサナギ。
しかし、ユイも首を横に振る。
がつくりと肩を落とすアイリーン。

「仕方ないわね、説明してあげるから聞いててよ？」

「ういうい。ヨロシク！」

「……ヴァンファールが設立されたのはちょうど1年前。
あまりにイシユタルの犯罪率が高い為に結成されたいわば
武力組織よ。彼らは町の運営権利と引き換えに

必ずその町を守ってみせると約束してくれるのよ」

「ほゝ、そりやまたご大層な。本当に守ってくれるの？」

「ええ。以前私も調べた事があったけど、ヴァンファールが守って
くれている町は、他の町と比べて圧倒的に犯罪が少ないわ。

まあ、やり方が結構きついっていう事もあるけど」

「きつい？」

「犯罪者に対しては容赦がないのよ。例えば、この場で私達が
食い逃げしたとして、ヴァンファールは私達を『殺し』にかかる
わ」

「……まじ？」

「それ位容赦が無いって事。だから下手に犯罪も出来ないわけ」

クサナギはスプーンを口に入れたまま硬直。

すかさずユイに今の残金を聞いていた。

「大丈夫よ、私だってお金は持つてるから」

「そっか、そりや良かった。すみませーん！ おかわりを……」

「あのね、限度は考えてね？ あんた食べ過ぎだから」

その後、クサナギは腹が一杯になりご満悦。

爪楊枝を口にくわえて背もたれにもたれかかる。

一方ユイは、トランクの中から何種類かのパーツをテーブルの上に
取り出し丹念に調べていた。

他の者から見ればユイのこの行動はガラクタで遊んでいるようにしか
見えないだろう。

「ユイ、『レイドリック』の調子はどうだ？」

「三番の弾がちょっと少なくなってるのと、二番、四番のフレームに
ほんの少し歪みがある。けど、予備のパーツで何とかなるから、
特に問題ない」

淡々とした口調で話すユイ。

そして、その言葉に興味を持った人が一人。

「ねえ、レイドリックって何？」

アイリーンの目が輝く。

大体の想像はアイリーンにもついていたが、それ故に
興味深々であった。

めんどくさそうに顔をしかめるクサナギ。

「銃の名前だよ。ダサイ名前だろ？」

「あれ？ アンタが決めた名前じゃないの？」

「俺ならこんなダサイ名前じゃなくて『ゴージャスブラッド・クサ
ナギ』」

「っていうカッコいい名前に……」

「……レイドリックで良かったわ。それにしても、変わった銃よね？
貴方達の銃。あんなの見たことないわ」

テーブルの上に置いてある銃のパーツ。

それらはどの部品がどの部分に当たるのがアイリーンには

さっぱり分からなかった。

ただ、この少女の手によってこのパーツが命を宿す。
その事だけは分かっていた。

「まあ、この銃は特殊で、えっと、なんだっけ？　タキヨクホーホケ？」

「たきよくめんそうていほうしきけんじゅう
……多局面想定方式拳銃」

「そう！　それだユイ！」

「な、何？　その名前？」

「……簡単に言うと、どんな状況にも対応できる銃。パーツの組み合わせに

よって、『一番』から『六番』までの種類の銃に変更できる」

説明できないクサナギの代わりに説明するユイ。

だが、説明している時のユイの顔は何処と無く嬉しそうだった。

「そんなにあるの？」

「まあ、アイちゃんが見たのは一番と三番の二種類だったかな？」

「ええ。他の種類はどんなのが有るの？」

「まあ、それは出た時のアイちゃんのお楽しみにしときなさい。

……だけどだな」

急に眉間にしわを寄せるクサナギ。

その理由がわかっていいるのか、ユイも顔をしかめる。

その二人の変化に戸惑うアイリーン。

「えっ？　どうしたの？　何か問題あるの？」

「どうしても『六番』だけは好きになれないんだよね、あれだけは」
「……私も」

二人してため息をつく。

その様子に驚きを隠せないアイリーン。

この二人にこれほどまで言わしめる六番の存在。

「ど、どんなの？」

「うーん、何ていうか『使う所が無い』武器かな？ 全く、あんなの作るオバサンの神経疑うぜ」

やれやれと、クサナギは肩をすくめる。

彼ほどの使い手に、使う所が無いといわせる武器。

アイリーンはそれも興味を引いたが、それよりも初めて出てきたあの銃の作り手の名前の方が気になった。

「オバサン？」

「そう、オバサン。この銃を作った人で、一言でいうならバケモノ？」

「クサナギ、それ、先生の前で言ってみたら？」

「ハッハッハ、言えるわけ無いだろ？ 多分あの人の事だから、

『よく言った。どうやら私の教育が行き届いてなかったようだな？

なに、たまたま偶然にもお前の墓穴を作っておいてやっていたから、

その中でたっぷり反省しておけ』何て言われかねないからな」

笑いながら凄い事を話すクサナギ。

冗談よね？ と口の端が引きつるアイリーン。

そして、ユイのパーツの点検も終わり、これからの事を話し合う三人。

「それじゃあ、当面の目的は『アクアレイク』に行くのね？」

「ああ。そこで『レッド・アイ』の連中を捕まえればいいが」
「レッド・アイって何なの？」
「な〜に、アイちゃんは知らなくていい」

アイリーンは直ぐに反論しようとするが、
サングラスの奥で見える殺気じみた目がそれを遮る。
今はまだ聞かなくても、後で分かる。そう考えてアイリーンは
この場で聞く事を断念した。

「……ここからアクアレイクは10日はかかるわね。それに、
その間にある『ハイドタウン』が問題ね」
「？ ハイドタウン？ それが何の問題があるんだ？」
「まあ、行ってみればすぐにわかるわよ。それじゃあ出発は何時？」
「今からだ。早いところ行きたいからな」

クサナギの言葉にユイも頷く。
アイリーンもそれに反対する理由もない。
三人はすぐさま出発しようとするのだが……。

「なんだと！ てめえ！？ もう一度言ってみろ！」

レストランの奥の方がなにやら騒がしい。
三人は椅子から身を乗り出しその方向を覗くと、二人の男が
揉めていた。

一人は肩に刺青いれずみを入れた腕つぶしに自慢がありそうな
筋肉質の屈強な男。
そして、その男に絡まれている男がいた。

外見は20代前半と思われる。

サラツとしなやかそうな肩まで伸びた赤い髪。冷静さを漂わせる鋭く細い眉と眼つきに、吸い込まれそうな黒い瞳。

顔はやや痩せており、若干頬がこけているように見えた。そして、もっとも目を引くのは灰色の擦り切れた外套^{マント}。全身を包むその外套は、まるで何かを隠すような印象を漂わせる。

彼は、外套から片手を出して刺青を入れた男を無視して、テーブルの上にある紅茶を飲んでいた。

「何々？　もしかして喧嘩の予感？」

そんな波乱の予感を察知して、ワクワクと嬉しそうに喋るクサナギ。

彼の予感は当たっていた。

外套の男はそんな雰囲気ではなかったが、刺青を入れたゴロツキは一触即発の状況になっていた。

そんな様子に周りの客は知らないフリをするか、クサナギのように観戦にしゃれ込んでいた。

慌てて、店の男従業員が二人の下へと駆けつける。

「ど、どうかなさいましたか？　お客様？」

「この野郎がだな、俺の服に紅茶を散らしゃがって、弁償しろって言ったら、お前のような奴に弁償する必要は無いって言ったんだよ」

そいつって、刺青を入れた男はシャツについた染みを

従業員に見せ付ける。

そこには、ほんの少し、注意して見ないと分からないぐらいの染みがついていた。

「わ、分かりました。こちらのほうで弁償いたしますので」

「ほう、そうかい。じゃあ、2万オームでいいわ」

「に、2万!？」

この世界では、2万オームというのは破格。

刺青の入れた男のシャツがいかにも良い物だとしてもシャツというのは精々200がいい所。

「お、お客様、さすがにその値段は……」

「何だ？ 払えないってのかい？ それじゃあこっちのやさ男に払ってもらうしかないよな!？」

再び外套を着た男のほうを睨む刺青の男。

外套を着た男は、紅茶のカップを静かに置いて立ち去ろうとする。その行動に刺青を入れた男は腹を立てたのか、後ろから肩を掴み、男を振り向かせて胸倉を掴む。

「いい度胸してるよな？ 俺を無視して立ち去ろうとするなんてよ!？」

「……か？」

「あん？」

外套着た男がボソボソと小声で喋る。

一瞬、何を言っているのか聞き取れなかった刺青の男。だが、彼の言葉を聞いて一驚する。

「死にたいのか？」

はつきりと聞こえた。

外套の男は一言一言はつきりと聞こえるように喋る。

その言葉からは刺青の男におびえた様子など無く、逆に刺青の男の顔から血の気が引く。

だが、引くに引けないのか、手を離そうとしなかった。

その様子を傍から見ていたクサナギ達は。

「ちよつ、ちよつと！ 助けたほうがいいんじゃない？」

「ん？ どっちを？」

「あの外套の人に決まってるでしょ！？ あのままじゃ殺されちゃうわよ？ あの筋肉ダルマに」

「んゝ、そうだな」

よつこらしよ、とゆつくりとクサナギが立ち上がる。

それと同時に事件は起きた。

「し、死んだぞデメエー！」

刺青を入れた男が殴りかかろうとする。

その瞬間、『何か』が宙を舞った。

最初それが何なのか分からなかった。

ドサツと、地面にそれが落ちると。

「ヒッ！ きゃああああ！」

女性客の一人がそれを見て悲鳴をあげる。

手羽先のように見えるそれは、紛れもなく刺青の男の手だった。

刺青の男を見ると、外套の男を掴んでいた手首から先が無くなって

いた。

「えっ？ お、俺の……て、手がああ！？」

何秒かの硬直の後、自分の手がなくなっている事に気づき、錯乱する刺青の男。

対称的に、外套の男は至って冷静だった。

外套の男の手には何時の間にか刀が握られていた。不気味な赤い刀身。

そして、更に驚くべきはその刀を握っていた腕だ。

外套から出したもう片方の腕は白銀の義手。

形は西洋の甲冑に近く、それは肩まで伸びていた。

外套の男は義手だというのに、誰の目にも止まらぬ速さで男の手首を一閃したのだ。

店の中は一瞬にして阿鼻叫喚に包まれる。

ある者は店から飛び出し、ある者はその光景に気を失う。

クサナギ達はそのどちらにも属さず、外套の男を観察していた。

「……あの義手、凄い」

「えっ？」

「あれは多分レア・メタル「ニムバス」製。ニムバスは強靱な強度と共に

柔軟な弾力を持つ希少金属。あれを義手の素材に使えば細かい動きを

可能にできる。また、随所にクロッドカーボン鋼を使用して、強度を

あげてる。あの義手なら、生身の腕を超越する……あんな義手作れるの

先生ぐらい」

ユイが感嘆の声をあげる。

普段無口の彼女がこれほどまで饒舌になると言う事はそれほど凄いものだという事は容易に想像できる。

そんなユイとは裏腹に、クサナギの顔は険しくなっていた。

「……ユイ、一番だ」

「！？ あなたまさか、戦う気じゃないでしょうね!？」

クサナギはアイリーンの言葉を否定しなかった。

ただ無言で外套の男を見つめていた。

一瞬でレイドリックを仕立てるユイ。

そして、クサナギは何時も通りの紅い銃を手
に外套の男に近づいていった。

外套の男は、錯乱する刺青の男を見下した表情で見つめる。
赤い刀を手にくっくりと近づく。

「警告したはずだ。これ以上俺に構うと死ぬと」

「ひっ!」

凍りのような冷やかな印象をうける外套の男の声。

もはや刺青の男に抵抗する気は無かった。

だが、外套を纏った男は止めを刺しにきていた。

赤い刀の切っ先が天高く伸びる。

そして、そのまま一気に振り下ろされようとした瞬間。

「はい、そこでストップね」

陽気な声が赤い刀の動きを止める。

もう数秒その声が遅ければ刺青の男は真つ二つだっただろう。

「……貴様、何のつもりだ？」

外套を着た男は声の主を睨みつける。

そして、ゆつくりとクサナギの方へと体を向ける。

「いやなに、そちらの人はもうアンタに刃向かう気がなさそうだから放っておいてあげていいんじゃない？ ほら、行った行った」

クサナギは手で追い払う仕草をする。

刺青の男は逃げるようにその場を後にする。

外套の男は刺青の男をそのまま見逃す。

しかし、それは矛先がクサナギへと変わった為であった。

「しかし、アンタ本当に止め刺す気だったの？」

「当然だ。俺は相手が誰であろうと遠慮はしない。

邪魔する者は殺す。それが蠅はえのような存在でも」

「……それはあの筋肉ダルマを助けた俺も同罪って事？

あちゃー、そりゃ勘弁。邪魔したのは悪かったけど、いい加減

その刀を俺に向けるのやめてくれない？」

外套を着た男は刀を納めようとはしなかった。

それは、目の前のチャラチャラした男が危険だと察していたからだ。

男は言葉ではなだめようとしているが、体中からどす黒い殺気を

放っていた。なにかキツカケがあれば直ぐにでもこの男は自分を殺

しにかかる。

そんな印象を外套の男は感じていた。

「……それは無理な相談だ。貴様の方こそ、その銃を外したらどう

だ？」

外套の男はクサナギの腰に着けてある銃に目を向ける。

「断る。アンタが刀を納めるのが先だ」

互いに危険を察知しているのか、譲らぬ意見。

二人の間の空気が重くなる。

次の瞬間には何が起ころうともおかしくない状況。

クサナギは腰にある銃に手を添え、外套の男は刀を握り直す。

そして、次の瞬間。

「ちょっと！ あの場合を止めただけでいいのに、あんた何ちよっかいだしてるのよ！ バカ！」

アイリーンの声が響く。

アイリーンはクサナギの後頭部を殴り、腕を引っ張って店を出ようとするが。

「……待て」

外套の男の声でピタリと動きが止まる。

何を言われるのかドキドキしている様子のアイリーン。

「サングラス、貴様の名は？」

「ん？ 人に名前を尋ねる前に、自分の名前を出すのが常識だぜ？」

「……クリス。クリス＝ラーズレイだ」

挑発とも思えるクサナギの言葉にあっさり応じたクリス。その意外な反応にチツと舌打ちをするクサナギ。

「クサナギだよ」

「クサナギか……貴様に一つ聞いていいか？」

「あん？」

「貴様は『片腕に蛇の模様をつけた女』を見た事はないか」

「知らないね」

「……そうか」

そうして、クリスは外に出ようとする。

クサナギとすれ違いざまに。

「今度邪魔をすれば次は無いぞ」

ポツリと言葉を告げてレストランを後にするクリス。

クサナギはそんなクリスの後姿を見ながら。

「けっ、次に会う時が無いだろうよ」

これがクサナギとクリスの最初の出会い。
彼等の因縁はここから始まった。

第二章『白銀の義手』 2

彼の姿はあまりにも浮いていた。

綺麗な町の外観にそぐわぬ擦り切れた外套。

周りの者たちは皆、彼の事を浮浪者か何かと思っていた。

彼も本来ならこんな町に来る予定は無かった。

自分が本来居る場所とは違い、あまりに眩しすぎるこの町。

久しく忘れていた感情が微かに甦る。

だが、すぐにかき消す。

もし、その感情が戻るとすれば、自分の目的が達成した時だ。

彼は目的を達成する為にこの町に出向いた。

だが、結局の所彼の無駄足に終わってしまった。

ならばこの町に長居は無用。

そう思つて彼は直ぐに町の出口へと向かっていた。

だが……。

「兄さん、ちよつと顔貸してもらえる？」

彼の目の前に4人ほどの悪人面の男がいた。

面倒な事に巻き込まれる前に出て行きたかった。

彼の心中は穏やかではなかった。

目的は達成できなかった。

先程のサングラスの男との出会い。

そして、この足止め。

……歯がゆい。そう、感じていた。

彼は4人に四方を囲まれある場所へと連れて行かれる。

そこは工事途中でほったらかしにされたビル。
中はただっ広い空間が広がり、スカスカの状態で
露骨にむき出しの鉄骨。

地面には資材と思わしき鉄部品が無残に転がっていた。
唯一、外からは見えないようにビル全体にシートがかけられていた。
彼は中へと連れられて行く。

そして、目の前には先程の手首を失った男が居た。
男の周りに10人ほどの手下と思われる男達がいた。
その状況である程度彼は察した。

「さつきはよくもやってくれたな、ええ！」

怒りに満ちた声がビルに響き渡る。

周りにいる男達が隠し持っていた武器を取り出す。
彼はそんな状況でも一切取り乱したりしなかった。
それどころか。

「ふん、怪我の具合は至って良好のようだな？　いつその時
片腕を切ってしまったえばよかったか」

挑発とも思える言葉を発した。
そんな言葉を受けた刺青の男はこめかみに青筋を立てていた。

「なんだとテメエ！　お前のおかげで俺は手を失ったんだぞ！？
この落とし前はきっちりさせてもらうぜ！」

周りの男達がじりじりと彼ににじみよってくる。
次の瞬間に待っているのは一方的な暴力。
そう、思っているのは彼等だけ。

外套を着けている彼だけは違う事を思っていた。

「……くだらん」

周りの男達を見渡して彼はポツリと呟く。

そして、彼は一振りの刀を取り出す。

不気味なほど真っ赤に染まった刀身。

そして、それを持つのは白銀の義手。

彼はあの時断言した。

『相手が例え蠅のような存在であろうと容赦はしない』

そして、彼はそれを実行した。

第二章『白銀の義手』 3

「あゝあ、何やってるんだ？ 俺は」

愚痴をこぼしていたのはクサナギ。

それもその筈、彼らはいまだプリズムシティに居た。

「……アイリーンがデパートに買い物に行ってくて言ったからここに居る」

「そんな事は分かってるよ！」

ぐあゝ！ と、デパートの前のベンチに寝転がるクサナギ。
その隣でちょこんと座っているユイ。

「……ねえ、クサナギ」

「ん？ 何だユイ」

「あの時、どうしてあんなにあの人に突っかつたの？」

先程のレストランでの出来事。

あの時のクサナギは異常だとユイは感じていた。

そんなユイの言葉にクサナギは……。

「さあ？ なんでだろう？」

とぼけた顔をしてユイの質問をかわす。

しかし、クサナギには心当たりがあった。

だが、そんな事をユイに話した所で何の意味も無い。

それ以後言葉の無い状態が続く。

そんな状況に先に根をあげたのはクサナギだった。

ベンチから体を起こし、おもむろに立ち上がる。

「よし、ちょっと散歩でもするかユイ」

そういつて、ユイの手を引き、辺りを散歩する事に。

デパート周辺は人ごみが多い為、少しはなれた場所を散歩に選ぶ。そこは、開発途中のビル街。

何も無いため、人は好んでこんな場所には来ない。

少しデパートから離れたが、直ぐに戻れば問題ないだろうとたかをくくるクサナギ。

だが、運命とはなんと皮肉なものか。

「クサナギ」

「ん？ どした？」

最初に異変に気づいたのはユイだった。急に立ち止まり、あたりを見回す。

「……変な臭いがする」

何処からともなく異臭がする。

この異臭はどこからだろうと探すユイ。

まるで何かに取り憑かれた様に歩き出す。

そして、ある工事中のビルへとクサナギ達は誘われる。

中に入るクサナギ達。

そこで見たのは……。

「っ！？」

絶句した。

何かの絵画のように地面に出来上がった血の模様。その周辺には彫刻のように出来上がった人の山。中心にはそれを作り上げた人間がいた。彼は入り口にいるクサナギ達に気づく。

「また、貴様か」

「……クリス」

クリスの顔や外套には返り血がついていた。

この惨劇は普通の者でも計り知れない衝撃だろう。

しかし、クサナギにとってこの光景はそれ以上のものだった。

「お前がやったのか？」

「ああ。先程の仕返しらしい、馬鹿な奴らだ」

あたりを見回すと、先程の刺青の男が目を見開いて息絶えていた。

クリスは刀の血を拭う。

そして、鞘に納めようとした瞬間。

「ぐ……た、助けて」

微かに生きている者がいた。

必死に這いつくばってクサナギ達に助けを乞う。

クリスはそれを見て、その男に近づく。

「おい！ もういいだろ！ そいつは見逃してやっても！」

クサナギは必死に叫ぶ。

今からでも遅くない、すぐに治療すれば助かるかも知れない。だが、クリスの決断はあまりに無情だった。

「断る。生かせば後で何かと面倒になるからな」

クリスは刀をその男の背中に勢い良く突き立てた。

男は一瞬悲鳴をあげて息絶えた。

その光景を目の当たりにしたクサナギは……。

「クリイイス！」

クサナギの中で何かが切れた。

もはや、その表情は親の仇を見るような怒りの形相。

腰にあったレイドリックを咄嗟に抜く。

「なぜだ！　そこまでやる必要はなかったはずだろ！」

「そこまでだと？　言っただけだ、俺は例え蠅のような存在でも容赦はしないと」

その言葉に、クサナギは唇を噛む。

クサナギも悪人に対しては容赦はしない。

だが、抵抗する力がない者には手をあげない。

しかし、クリスは違う。

彼は、例え相手がだれであろうと殺す。

それはまさに、あの時の殺人鬼と一緒だ。

「貴様はまさかこんな奴らに同情でもしているのか？」

「同情？　するわけないだろ。こんな事になったのはあくまで

こいつらの自己責任。だが、そこまでする必要もなかったのも事実だろうが！」

死体をみると、大半の者は背中からばっさり切られている。

それが意味するもの。

それは、クリスが逃げようとした奴らも見逃さなかった文字通り皆殺しであった事を表す。

「……貴様は俺と同じ人間だと思ったが気のせいかな」

「何？」

「あの時に見せた殺気、あれは生半可な人間が見せられるものではない。」

「本当の地獄を見た奴だけが出せる憎悪。貴様にも『殺したい人間』がいる。」

「違うかな？」

クリスの言葉が胸に刺さる。

彼の言っている事はほぼ的を射ていた。

しかし、彼とクサナギは決定的に違う所がある。

「ああ、確かに俺は殺したいほど憎い奴がいる。だがな！ お前みたいに

誰でもいいから殺したい奴と一緒にするな！俺は、そんな奴がだいっきらいなんだよ！」

その言葉に、クリスは静かに刀を構える。

前のめりの前傾姿勢。

腰の辺りに両手で刀を握り、踏み込むと同時に切る構えだ。

「……奇遇だな、俺も貴様みたいな甘っちょろい奴は嫌いだな。それに、言っただけだ。今度邪魔をすれば次は無いとな」

一瞬で空気が張り詰める。

もはや戦いは避けられない状況。

この時二人は互いに共通して感じているものがあつた。
それは……。

『目の前に居るこの男が気に食わない』

第二章『白銀の義手』 4

昼下がりの工事現場。

町並みから外れたこの場所に人は通らない。

辺りでは工事のために使う鉄を打つ音が響く。

カーン、カーンと一定のリズムで打たれる鉄。

それはまるで、今から行われる殺戮劇^{シヨウ}の幕開けを知らせる鐘のようだった。

銃を構える男と、刀を構える男の睨みあい。
互いに相手の隙をうかがう。

距離だけで言えば圧倒的にクサナギが有利。

目測で30mは離れている。

一歩二歩進んだだけで刀が届く距離ではない。

刀が届く距離になるまでに確実にクサナギなら倒せる。

後は、クリスが動いたと同時に銃を合わせれば良い。

「……なるほど、そういう事が」

静かにクリスが口を開く。

だが、その口調は話し合いをするような気配ではない。

「貴様はどうやら『今回』は俺に対して憎んでいるようだな」
「今回？」

「店で出会った時と殺気が違う。どうやら貴様はあの時俺では無く、違う人間を照らし合わせていたようだな。

貴様の殺したい相手……それは刀を使う相手のようだな」
「……さあな」

無愛想に答えるクサナギ。

だが、手ごたえを感じたクリスは尚も喋る。

「そうだな、貴様を倒した後はその幼女でも切り刻むとするか」

そういつて、チラリとユイの方を見るクリス。

その挑発とも思える言動が戦いの火蓋を切る。

クリスの言葉にキレたクサナギが引き金を引く。

しかし、それをクリスは待っていた。

相手が「先に」放つ一発目。

先程からクリスに向けられていた銃口。

故に、その弾道は簡単に予測できてしまうのだ。

クサナギが放った弾丸とすれ違いに外套がなびく。

30mほどあった距離を一瞬にして0にしてしまう程の踏み込み。

その踏み込みの速さに驚くクサナギ。

そして、踏み込むと同時に電光石火の一撃が繰り出される。

クサナギの体を横一文字に切り裂こうとする赤い牙。

しかし、その行動は先程の構えから予測できていた。

幾ら剣速が速いとはいえ、あまりに単純^{シンプル}すぎる。

当然のように、クサナギは後ろに身体を引いて避ける……が。

「フッ！」

横一文字に切りさこうとした牙は、クサナギの体の中心で止まり、

『突き』に変わる。

しかし、これも予測の範囲内。

クサナギは体を捻ってコレも避ける。

この瞬間、クリスの体は大きくバランスを崩していた。

すかさずクサナギは銃をクリスの額に向けようとする。
この至近距離ならまず外さない。

だが次の瞬間、信じられない事が起こる。

クリスは生身の腕を刀から離し、義手の腕のみで刀を握った状態にする。

そして、義手が180度回転したのだ！

自然と刀の刃が切り上げる形に変わってしまったのだ。

横薙ぎ 突き 切り上げの三段構え。

元よりクリスはこの切り上げこそが本命。

そして、赤い牙がクサナギの首めがけて襲い掛かる。

本来なら有り得ぬ刀の軌跡。誰が避けられるだろうか？

そう、この行動が『分かって無ければ避ける事はできない』だろう。

それはクリスが一番分かっていた。だが……。

「っ！」

何と、クサナギは間一髪この攻撃をかわしたのだ！

クサナギは態勢をわざと崩し、背中から地面に落ちる動作でコレをかわす。

そして、すかさずクリスめがけて銃を発砲。

地面に倒れる前に3回引き金を引く早業。

銃弾をかわしつつ、クリスは慌てて距離を離す。

クサナギが立ち上がると、かけてあったサングラスが落ちる。

どうやら、先程の一撃で切れていたようだ。

もし、後コンマ一秒遅れていれば首がとんでいただろう。

互いに態勢を立て直し、次の行動に備える。

「ユイ！ 予備パーツで『二番』だ！ 時間は計っておいてやる！」

言葉と同時に真横に走り出すクサナギ。

それと平行に走り出すクリス。

一定の間隔をあけての並走。

走りながら銃を発砲するクサナギ。

しかし、クリスはいともたやすくそれを刀ではじく。

この状況はクサナギにとって最悪だった。

少しでも攻撃の手を緩めれば奴に近づかれてしまう。

故に無駄弾と分かっていても撃たなければならない。

更にビルの中は広いとはいえ、限界がある。

このまま並走し続けられいずれ壁に激突する。

壁に激突するのが先か、弾薬が尽きるのが先か。

いずれにせよ、そうなってしまうと後はあの赤い刀が容赦なく襲い掛かるだろう。

「チツ！ しつこい男は嫌われるぜ！」

「残念ながら、既に嫌われているからな」

クサナギは途端に足を止めてクリスを向かいつつ。

レイドリックを弾薬がある限り連射する。

しかし、クリスは弾丸をはじいて少しずつ間合いを詰める。

幾ら自動拳銃で連射が可能としても一発一発の間に確実に誤差がある。

その誤差がクサナギにとっては命取り。

そしてついに、スライドが停止して機関部が露出した状態になる。

『ホールドオープン』だ。

これは、銃に弾薬が切れた事を意味するものである。

この状態の意味をクリスは知っていた。

すかさず、弾薬を補充させる前にケリをつけようとクサナギに

走りこむ。

そして、二の太刀はいらぬといわんとばかりに渾身の袈裟切りを放った。

コレでクサナギの胴体は真つ二つになると思われていた。

しかし、クサナギの体に触れる寸前に歪な金属音がビルに響き渡る。

「なっ!？」

驚いた声をあげたのはクリス。

彼が放った渾身の袈裟切りは、紅い銃によつて防がれていた。しかし、彼が驚いたのは刀を止められたことではない。

”切れなかった事だ”

彼の刀は全てを一刀の元に両断する切れ味。

実は、彼の刀はある名工が作り上げた最強にして最凶の刀。

如何なる物を切り続けても刃こぼれ一つしない刀。

彼自身、今までで切れなかったものなど無かった。

しかし、今この場で初めて切れぬものと出会ったのだ。

愕然とするクリス。

その隙をクサナギは見逃さなかった。

すかさず、クリスのみぞおちに渾身の蹴りをぶちかました。

ぐっ、と苦悶の声を漏らしながらクリスはわずかにのけぞる。

その距離は僅かにしろ、クサナギにとっては願っても無い事だ。

何しろこの時既に、新しい武器がクサナギめがけて飛んできているのだから。

彼を倒すにはどうすればいいか？

答えは簡単、彼を近づけさせなければいいだけだ。

彼に対して使う銃は、近づかせない事、”手数”の方が重要。そう考えると、「一番」の自動拳銃や、「三番」の散弾銃などではあまりに役不足。

クサナギはユイから投げられた銃を片手で受け取る。

クサナギが選んだ銃、それはトリガーの前方に大きくはみ出たマガジン

が特徴的な銃で、一分間に約600発程度の連射が可能な銃。

サブマシンガン
「短機関銃」

引き金を引き続ける事で連射が可能なフルオート式の銃だ。

更に、このレイドリックの短機関銃は珍しい事に、マガジンは二つ存在する。

一つはトリガー前方に付けられており、そしてもうひとつは、銃の後方に大きな筒状のマガジンが備えられていた。

このレイドリック「二番」の短機関銃の弾数はおよそ300を越える数の

弾がマガジンに装填してあるのだ。

すかさずクサナギは短機関銃をクリスに向けて放つ。

如何に彼が銃の弾をはじけるとはいえ、絶え間なく襲い掛かる

一秒間に60発もの凶器をどうやって返せようか？

彼自身にそんなスキルは存在しない。

だが、はじき返す術^{すべ}を彼は知っていた。

彼は義手だけで刀を手に持つと、義手の手首が高速で回転し始める。一瞬にして、刀のバリケードが出来上がる。

クサナギは発射し続けたが、バリケードを突破する事はできなかった。

銃弾を100発近く残し、対峙する。

クリスもクサナギの攻撃が止むと同時に義手の回転を止める。

「ちっ、えらく便利だな！ その義手！」

忌々しそうに見つめるクサナギ。

あまりに豊富すぎる義手のギミックに呆れていた。

「……貴様のその銃、誰が作ったのだ？」

「お前に教える必要は無い」

「そうか……ならば、貴様のその『眼』はなんだ？」

「これは生まれつきだ」

「誤魔化すな。青い眼の方はともかく、貴様のその『紅い眼』は普通ではない。何か仕組みがあるな？」

「……」

「先程の三段攻撃のかわし方、あれは反射神経の類たぐいでは無い。恐らく貴様は俺の攻撃を『分かつていた』違ちがうか？」

クリスの予測。

それはほとんどの中ちしていた。

彼の眼は普通の眼では無く、常人ならざる能力ちからを備わっているのも確かなのだ。

しかし、その仕掛けを話すほどクサナギはお人好しではない。

「だったら何だっていうんだ？ 諦めて死んでくれるか？」

「残念だが、俺にはやらなければならない事がある。それが終わるまで」

死ぬわけにはいかない」

「そりゃ残念。志半ばでここで俺に殺されるからな」

「貴様が只者でない事が解った今、全力で葬るとしよう」

クリスがそう告げると、刀を鞘に戻す。
そして、腰を僅かに落とし、生身の手を鞘に添え、義手で
刀の柄を持つ。
そして、彼は告げる。

「 ジェクト（開放）」

瞬間。異常な光景を目の当たりにする。

義手の接合部分が開く。いや、『展開』していく。
肩の辺りから金属の羽のようなものが生えてきていた。
接合部分が開いた所からは異様な音が発せられる。
まるで、うめき声のような音。

「！クサナギ、ダメ！」

「！？ユイ？」

遠くで見えていたユイが大声で叫ぶ。
彼女にはわかっていたのだろう。
あの義手が展開した意味。
そして、あれから発せられる一撃が『必殺』であることも。
ユイの叫びでクサナギは一瞬で悟る。
あれと戦ってはならない、逃げろと。
しかし、既に向こうの準備は終わろうとしていた。

「今更気づいても遅い、何処に逃げようともこの距離の時点で
貴様の負けは決まっている！」

そして、彼の一撃が放たれようとした時……！

突然、車がビルの中に突っ込んでくる。

それに気を取られるクリス。

ほんの一瞬。

しかし、その一瞬がクサナギ達の生死を分けたのだ。

すかさず、短機関銃を放つクサナギ。

しかし、先程と同じように鞘から刀を抜いてバリケードで防ぐ。

そして、車がクサナギ達に隣接する。

「ちょっと！ 早く乗って！」

「アイちゃん！ 助かった！」

緑色のジープに乗り込むクサナギとユイ。

そして、急発進でその場を後にした。

それを黙って見逃すクリス、いや、諦めたといったほうが正しい。

そして、彼はジープが見えなくなってからその場を後にした。

「いや、助かったよアイちゃん。でも、どうやってあそこが
わかったの？」

「念のためユイちゃんに頼んで発信機を付けさせてもらってたのよ。
それで、ビルに近づいてみたらあの状況だったわけ。でも、何が
あつて

あんな状況になったたのよ？」

「あ、それは道中で話すわ。しかし、これでアイツともおさらば
って

訳だな」

ぷは、と安堵のため息をつくクサナギ。

ユイも顔には出しては無かったものの、ほっと一息ついていた。

「クサナギ」

「ん？」

「時間……何秒だった？」

「……えっと、その、6分32秒06かな？」

と、今頃ストップウォッチの針を止めるクサナギ。

ユイの顔がみるみる不機嫌そうになっていく。

「……もういい。今度から自分で作れば？」

「わ、悪い！ だけどあの状況は仕方ないでしょ、ユイ」

「知らない」

「ゆゝいゝ！」

アイリーンはそんな二人を見ながらクスクスと笑う。
そうして、彼らは次の町へと向かった。

第三章『交わした約束』

俺は、この街が嫌いだ。

周りを見れば死んでいるように無気力な大人が道端で倒れている。
水は汚い、空気も汚い、人間も汚い。
そんなどうしようも無い街が俺の生まれた所だ。

だけど、こんな街でも楽しみがあった。

俺は何時も鉄屑をかき集めてそれを売る事で金にしていた。
親なんてものは俺の場合初めからいなかった。何時も一人だった。
そんな時、俺は同じ境遇の仲間と知り合いができた。
いや、『友達』ができた。

それからだ、楽しみができたのは。

「よお、待った？」

「いや、今来た所」

俺達は仕事が終わると、何時も決めている場所へと向かう。
そして、そこから二人で「ある場所」へと向かう。

「なあ、今日はどっちが勝つと思う？」

「俺は断然ハーディかな？ 20戦全勝の無敗の王者」

「でも今回の挑戦者のスレイガーだって負けてないよ？」

などと、談話をしながら向かう。

これから向かう場所は、本来なら俺達のような子供にはご法度の場所。

俺達はこそそと誰にも見つからないように地下の下水道に入る。

ヘド口と汚水の匂いで鼻が曲がりそうだ。

狭く暗いパイプを通り、やがて見えてくる一筋の光。

そこから賑やかな音が聞こえてくる。

そして目の前に現れたのは、丸い砂の舞台。

上からは太陽のように降り注ぐスポットライトの光。

舞台の周りを囲む席からは罵声や歓声などが入り混じった不協和音。そしてそれを一心に受け止める二人の主役が居た。

大人達はこういう目で「これ」を見ていたか分からない。

大方はショーやギャンブルの類たぐいだろう。

だが、俺達二人にとって「これ」は憧れだった。

他の遊びを知らないのもあったのだろう、俺達はこれが唯一の楽しみだった。

白熱する戦い、豪快に決まる大技、果ての流血。

子供心に火がついていた。

いつも見終わると今日の話に夢中だった。

互いに見た技を研究したりもした。

そうになると、見るだけでは飽き足らなくなるのは目に見えていた。

実際にあの舞台に立って戦ってみた感じ始めていた。

それから俺達は見よう見真似で練習をしだした。

傍から見れば喧嘩をしているようにしか見えなかっただろう。

とても試合と呼べるようなものではなかった。

単純な殴りあいだ。

見ては考え、試しに殴りあい。

そんな失敗の繰り返し。

けれど繰り返す度に殴る拳はさまになり、蹴る足は鋭くなり、何時しか

殴り合いの域を超えていた。

もつと強く、もつと強くという気持ちが何時しか芽生える。

それから何年も経ち、俺は決心した。

「えっ？　でていく？」

友人はやけに驚いた表情をしていた。

そして、俺を必死に引きとめようとした。

「出て行ってどうするんだよ！？」「約束」はどうするんだよ！」

「だから、その為に出て行くんだ」

「えっ？」

「正直、これ以上は誰かに学んだほうがいいと思うし、確かめてみたいんだ。

俺がどこまで通用するか」

その言葉に友人は黙っていた。

恨めしそくに俺を見る。

「……何時、帰って来るんだよ？」

「3年……いや、5年以内に帰ってくる。その時、約束を果たそうぜ」

「……絶対だぞ？　絶対、絶対だからな！」

「ああ。お前こそ忘れるなよ？」

そうして、俺は15年生きたこの街と別れた。

その時、もう「俺」は二度とここには帰って来れないとは思って
いなかった。

外の世界は新鮮だった。

見るものの全てが新しい。

街、人、食べ物。

そして、俺は片っ端から格闘に関する道場や建物に駆け込んだ。

だが、その時気づいた。

俺がいた街でやっているモノとは実は全く別物であるという事に。

それはまるで「遊び」だった。

防具に身を包み殴りあったり、組み手からはまるで殺気めいたもの
が感じられない。

あの街のような血生臭く、スリルと殺気に満ちた「あれ」とはかけ
離れていた。

正直、それだけでもガツカリだった。

更に俺に追い打ちをかけるようにそれは起こった。

「あ……がつ」

言葉にならぬ声を発しながら腹を抱えてうずくまる男。

それを呆然と見る周囲の観衆。

それも当然、いきなりはいつて来た部外者、つまり俺によってあつ
さり倒されたのだ。

” 一番強い奴と戦いたい ”

そう、告げて出てきたのが目の前でうずくまる男だ。

他の場所に行ってもすべて一緒だ。

そう、俺は強くなる為にあの街を出てきたのに意味が無かった。

俺は大会や道場を次々と乱入しては勝ち続けた。

何時しかそれは噂となっていた。

噂を耳にして駆けつけてくる猛者。

けれど、その猛者たちは俺の前で誰一人として立っている者はいなかった。

俺は一心不乱に戦い続けた。

どんな場所だろうと、どんな奴だろうと、どんな状態であろうと戦い続けた。

強くなれると信じて。

けれど、そんな日も長くは続かなかった。

ある日、体に激痛が走る。

立つ事もままならない程の激痛。

あまりの痛みに、そのまま俺は道端に倒れこんだ。
幸運にも通行人が俺を病院へと運んでくれた。

病院で伝えられる自分の容態。

それは、あまりに非情な死の宣告だった。

”君はもう、格闘技はできない”

医師からの言葉。

話によると、脊椎とやらの部分が損傷しているらしい。

普通の生活をするにはなんら問題は無い、けど、激しい運動などはもう出来ないだろうと。

これだけで済んだ君は幸運だったと、医師は笑って話す。

だが、俺にとってはそんな問題では済まされない。

何の為にここまでやってきた？ もう出来ないなどでは済まされない。

誓ったんだあいつと。

だが、現実はいかに過酷だ。
少しでも運動すれば発作のように発生する手足の痺れ。
ろくに力も入らない。

頑張れば頑張るほど虚しいほどの空回り。
そんな自分に悔しくて泣いた。
もう……どうしようも無いと。

街を出て4年が経った。

俺はまだ病院にいた。

ベッドに横たわり、生きているのか死んでいるのか分からない俺がいた。

いつそ、殺して欲しいとも思った。

だが、そんなとき突然「奴」が現れた。

そいつは花束をもって俺の病室に現れた。

「あんた、誰だ？」

俺には身内はいない。

かといって、そいつとは知り合いでもなかった。

奴は、俺にこう言ってきた。

「私は、あなたの知らないファンの一人です」

そういつて微笑む男。

布に包んだ長い棒のような物と、鮮やかな紅い瞳がとても印象に残る男だった。

それが、俺が「俺」であった最後の記憶だった。

第三章『交わした約束』 2

「なあ、『ハイドタウン』ってどんな所？」

車で移動中、助手席で横になっているクサナギが不意にアイリーンに尋ねた。

「ハイドタウン、別名『闇の街』」

「闇の街？」

「そう。他の街と比べて、とにかく「暗い」のよ。

みるからに負の感情丸出しの街って言った方がぴったりね」

「……そんな街に行くのか？」

「仕方ないじゃない、アクアレイクに行くルートは2つ。

一つは、ここから一週間かかる街に着いて、それから国境を渡る許可書を最低一ヶ月発行を待って行くルート。

そして、もう一つは3時間後に着くハイドタウンに行って、

関所を通るルート。さあ、どちらに行く？」

「……すいませんでした」

そうして、クサナギ達はハイドタウンへと向かう。

ハイドタウンに近づくにつれ、舗装された道は少しずつ荒んでいき、遂には荒地となんら変わりない道へと変貌を遂げる。

周りの草木は枯れ、目の前には黒煙を轟々と噴き上げる街が見える。街の中は異常な状態だった。

家の壁は強固な鉄板で出来ており、家本来の温かみを感じさせない。汚水や排煙による異臭。

道には浮浪者、店のキャッチ（呼び込み）らしき者が多く見られた。

アイリーンの言ったとおり、この町に『明るさ』など無かった。全てが暗く、負の感情に包まれていると言ったのは過言ではなかった。

その街を車で横断するクサナギ達。

クサナギは周りを見渡しへー、ほー、などと声を上げる。

「どう？ 初めて来た感想は？」

「こりゃ酷い。みんな生きてるのか死んでるのか」

「まあ、大半は死んでも同然じゃない？ どうせ『あれ』に金をつぎ込んだ人たちばかりだろうし」

「『あれ』？」

「私達には関係ないわよ。さてと、もうすぐ関所につくけど……まさかこの一年で変わってないでしょうね？」

などと、アイリーンが一人言をブツブツと呟く。

街中を進み、出口の近くに大きな門が見えてきた。

これが『関所』だ。

この場所だけはハイドタウンにふさわしくない厳重な警備が敷かれていた。

アイリーンは車から降りて、門番にIDカードらしきモノを手渡す。しかし……。

「な、なんですって！」

アイリーンの叫び声があたりに響く。

あまりの大きさに、横になっていたクサナギが飛び上がる。

アイリーンは門番と激しく口論をしている様子。

しばらくしてアイリーンが、がっくりと肩を落としてジープに戻ってくる。

「もー！ だからこの街嫌なのよ！」

アイリーンは八つ当たりのようにガンガンと車のハンドルを叩く。

どうやら、かなりご立腹のようだ。

「ど、どうしたの？ アイちゃん？」

「どうしたもこうしたも無いわよ！ 変わってるのよ、ＩＤカードが！」

もうこのＩＤカードは古いから使えないって！ まだ２回しか使って

無いのよ！？」

「じゃあ、どうするんだ？」

「また買っしか無いわね。この街ときたら、トップがコロコロ変わるからその度に買い直しなのよ……」

「それもあれかい？ ヴアンファールとかいう組織の陰謀？」

「違うわよ、この街はヴァンファールに任せてない街の一つ。

それだから、偉い奴が変わっていくのよ。しかも、この街にはあまりメリットが無いから、

ヴァンファールも無視してるらしいわよ？」

愚痴をこぼしながらアイリーンはＩＤカードを購入する為、関所を離れる。

そして、再び街中へと出向く。

「どづいうこと！？」

本日２度目のアイリーンの怒鳴り声が店に響き渡る。
アイリーンは店主と口論になっていた。

「だからお嬢さん、ＩＤカードは値上がりしたんだよ」

「あのね、上がったって言うても限度があるでしょ！　限度が！
なにが三万オームよ！

「ぼったくりもいい所よ！」

「ま、まあアイちゃん落ち着いて……」

「あんたは黙ってなさい！」

「は、はい」

さすがのクサナギも怒ったアイリーンにたじたじだった。

「で？　本当は幾らなのよ！」

「本当に三万オームだよ、なんなら他の店にも尋ねてみたらどうだい？」

店主のその態度にさすがに嘘ではないと悟ったのか、アイリーンは財布の中身を調べる。

しかし、財布の中身を見たアイリーンが顔をしかめる。

そして、申し訳なさそうにクサナギ達のほうを見る。

「ねえ、幾ら持ってる？　一万あれば何とか買えるんだけど……」

「ユイ、幾らぐらいだ？」

「……２万」

「おっ、買えるじゃないか！」

ほっと一息つくクサナギ達。

これでアクアレイクに行けると一安心していたが。

「あゝ、お嬢さんたち、言っておくけど一人三万オームだからな？」

その店主の言葉にクサナギ達の表情が強張る。
ギギギとロボットのようにな、店主に顔を向けるクサナギ達。

「な、なんじゃそりや〜!? 本当に詐欺じゃないか!」
「ただ一つ言える事は、あんた達貧乏人が買える代物じゃないって
事だよ!」

カカカと高笑いをする店主。
その店主を見たクサナギ達はというと。

「ユイ、『一番』だ」
「わかった」

大きく縦に頷くユイ。
どうやら二人共我慢の限界がきていたようだ。

「あなた達の気持ちはよく分かるけど、抑えて。後が面倒になっ
ちゃうから」

とりあえず現状のお金では到底足りない為、一旦店を出るクサナギ
達。

その後、他の店も訪ねてみるものの、やはり店主の言ったとおり同
じ値段で売られていた。

八方塞がりのクサナギ達。

とりあえず、近くの店で一休止をすることに。

「ねえ、これからどうする?」

テーブルの上でぐったりとなっているアイリーンが尋ねる。
その姿は生も魂も尽きたといった状態。

「これからもう一つのルート行ったら凄い時間かかるし……かといつてここに居座つても

お金が増えるわけでもないし……あれ？ どうしたのよ？」

アイリーンがブツブツと話をしていた時、なにやらクサナギの様子がおかしい。

目の前には注文されたパスタと飲み物が置いてあった。

「な……」

「な？」

「なんだ……？ この不味い飯は？」

わなわなと拳を振るわせるクサナギ。

眉間にしわを寄せていることからして、よほどご立腹のようだ。

「本来複雑な味わいを出すはずのソースに味気が無く、若干の固さが残るはずの麺は

茹ですぎてフニャフニャ……何というお粗末さ！」

「あんたどこの食通よ」

「許せん、ちよつと行つて来る」

「ちよつ！？ やめてよ！ 恥ずかしいから！」

食べ物に関して怒るクサナギを必死に止めるアイリーン。

そんなやり取りをしている時に、背後から誰かが近づいてきた。

「あら、もしかしてと思つたらやっぱりナギじゃない？」

「ん？」

背後を振り返ると、そこには赤いスーツに身を包んだ女性。

流れるようにサラサラとしていて、背中の辺りまで伸びた金色の髪。瞳は鮮やかな翠色。

形の整った唇が彼女の大人の魅力を引き出す。

ふくよかな胸とスレンダーな体型が見るモノをとりこにする魔性の美女がそこにいた。

「あれ？　もしかして『サラ』か？」

「お久しぶりね、ナギ」

「……久しぶり、サラ」

「ユイちゃんもお久しぶり、元気だった？」

サラと呼ばれる女性の言葉に頷くユイ。

そして、ゆっくりとクサナギの方に近づき、クサナギの頬に手を当てる。

「あなたに会えなくて寂しかったわ、ナギ」

「そうか？　俺はそうでもなかったが？」

「もう、そういう時は嘘でも寂しかったって言うものよ？」

そして、クサナギの首に腕を回そうと手を伸ばすサラだったが、強引に二人の間に割ってはいるアイリーンに阻止された。

「ちょっと、この女性は誰なの？」

キツと睨みつけるアイリーン。

みるからに不機嫌そうな声と表情を見せていた。

「ああ、そういえばアイちゃんは知らなかったな、サラの事は」

「サラ？　へえ、私はちゃん付けで、なんであの女性はちゃん付けされてないのかしら？」

「まあ、サラは最初からサラで呼んでたからな……」

「じゃあ、私もアイリーンで呼んでよ」

「いや、アイちゃんはアイちゃんだから」

「あ、あんたって人は」

あまりのクサナギの鈍さにガツカリするアイリーン。

「それで？ この女性とは……その、どういう関係なの？」

アイリーンはしどろもどろにクサナギに尋ねる。

どうやら心中は穏やかでは無い様子。

あまり聞きたくない答えが返ってこないかどうか不安なのだろう。
そんなアイリーンの心など知ってるわけもないクサナギの返答は。

「ああ、サラは商人なんだよ」

「えっ？ 商人？」

「武器の調達を主にやっている死の商人なんだけど、俺達に弾薬を手配してくれているのも

このサラなんだ」

クサナギの言葉にほっとするアイリーン。

「そういえば、弾薬の手配してもらってもいいか？ どうも切れかけてるみたいでな」

「ええ、いいわよ。けど……」

「けど？」

「今までの弾薬の費用を払ってからにしてもらわないとね？」

そういうと、ポケットから電卓を取り出し凄まじい勢いではじき出す。

電卓を打ち終わった後、金額をクサナギ達に見せる。
それを見た三人の目は点になっていた。

「……なあ、サラ」

「ん？ 何かしら？ ナギ」

「コレ、二桁ぐらい多くないか？ は、八百万オームって……」

「多くないわよ？ それでもおまけしてるぐらいなんだから。それ
にあなたの使う弾は

特別製が多いのよ、ミスリル製やらダラス鋼製やらで」

「悪い、無理だ。今俺達はIDカード買うお金をどうやって工面し
ようか悩んでるぐらい金が

無いんだよ……」

「IDカード？ なんでそんなの必要なのよ？」

「まあ、実はな……」

事の大筋をサラに話すクサナギ。

それを聞いたサラはなにやら不敵な笑みを浮かべていた。

「ねえ、なぐぎ」

甘い猫なで声でクサナギを呼ぶサラ。

その声にビクリと肩を震わせるクサナギ。

「良かったら私がそのIDカードの費用と弾薬代を工面してあげて
もいいわよ？」

「えっ？ ほんとうですか！？ サラさん」

突然のサラの申し出に驚きを隠せないアイリーン。

ニコニコと微笑むサラに対して、クサナギの方は顔に手を当ててな
にやら

不安を隠せない様子。

「勿論。でもそれは、私の頼みごとを聞いてくれたらの話なんだけどね？」

「嫌だ、断る、サヨウナラ」

好条件に迷う事無くきっぱりと否定するクサナギ。

そして、そそくさと店から出ようとする。

そんなクサナギを引き止めるアイリーン。

「ちょっと！ 折角の申し出を断る気？」

「アイちゃんはこいつの依頼を知らないからそんな事言えるんだよ！ 過去に

弾薬の工面で請け負った依頼が2回あったが、とんでもない依頼だった。

もうこりこりだ」

ヤダヤダと首を何度も横に振る。

とは言うものの、現状を打破する方法はサラの言っている条件を飲むしかない。

しかし、それを分かっているながらもクサナギは拒否し続ける。

「ねえナギ、話だけでも聞いていかない？ この仕事は多分あなた向き……いえ、

”あなたにしかできない”仕事なのよ」

その言葉にクサナギは戸惑った。

こんなに下手に出るサラを初めて見たからだ。

その為自然とサラの依頼に興味を持ってしまった。

クサナギは店のソファーにドスンと勢い良く座り、その隣にユイと

アイリーンが座る。

それを見たサラは向かいに座った。

「それじゃあ、依頼を受けてくれるのね？」

「ああ。その代わり、弾薬とIDカードの方は……」

「分かってる、ちゃんと工面しておくわ。それじゃあ、依頼の方な
んだけど……」

ごくりと喉を鳴らす三人。

一体どれほど恐ろしい依頼が飛び出るのかドキドキした様子。

そして、サラの口から出た言葉は。

「とりあえず、店、でましようか？」

「「は？」」

店を出たサラは、どこかへと歩き出す。

それを後ろからついていくクサナギ達。

街中を抜けて、直ぐ近くの郊外にある大きな一軒家へと向かってい
く。

レンガ造りで煙突付きの立派な一軒家。

サラは、ドアをノックして直ぐに中へと入っていく。

それに連れられてクサナギ達も中へ。

家の中は木目調の板張りの床で、周りには様々な生活用品が置かれ
ていた。

そして、その家の中央で車椅子に座っている20代前半の青年がい
た。

髪は黒く、気さくな感じのする青年だった。

青年はサラが来たのに気づくと、車椅子を器用に操って近くに寄っ
てきた。

「サラさん、今日はどうしました？」

彼は少しでも微笑みながら話しかけてきた。
明るい、はりのある元気な声だった。

「実は、あなたの依頼に応えれそうな人物が見つかりました」

「！ ほ、本当ですか！？」

「はい。こちらにいる人物です」

そういつてサラはクサナギの方に手を向ける。

サラに紹介されて、クサナギは僅かに頭を下げる。

車椅子の青年はクサナギの方へと近づく。

「初めまして、僕の名前は「カミュ」といいます」

「クサナギだ」

カミュと呼ばれる青年が握手を求めるようにクサナギに手を伸ばす。
クサナギはそれに応える。

「で、どんな依頼なんだ？ サラ」

「あ、それは私の方から説明した方がいいですね……」

そういつて、カミュは少し表情が暗くなる。

彼は震える声で。

「私の友人を、唯一無二の友人を救って欲しいのです」

第三章『交わした約束』 3

「救って欲しい？」

壁にもたれかかって驚きの表情を見せるクサナギ。

そして、ちらりとサラの方を見ると大きなため息をついた。

「おい、何処が俺にしか出来ない仕事なんだよ」

「まあまあ、とりあえず話を全部きいてからそういう事を言って欲しいわね。」

それに、簡単に越した事も無いんじゃないかしら？」

サラの言葉に確かに、と納得した様子のクサナギ。

そして、カミュの話が続く。

「友人とは子供の時から長い付き合いで、それは仲が良かったものです。」

そして、彼が大きくなり、この街を出て行こうとしたときある「約束」を

かわしたのです」

「約束？」

「まあ、とりあえず聞くより見たほうが早いわね。皆で地下に行つて見ましようか？」

「！ 地下！？ ま、まさか『あれ』に行くつもり！？」

サラの提言に驚くアイリーン。

そして、サラに連れられるままにカミュの家をでて、街中へと再び進む。

カミュの車椅子を押しながら人ごみを掻き分け、街の奥へと進んで

いく。

街の奥には人の出入りが激しい地下へと降りる階段があった。中に入ると、そこには街とはまた別の顔が存在していた。

それは街とは比べ物にならないほどの人の多さ。

等間隔で存在する出店のような賭博場。

昼間のように明るい地下の灯り。

皆、殺気だっているのが見て取れる。

クサナギ達はその光景におもわず目を丸くしていた。

「これはまた凄いな、アイちゃん」

「まあね、この街の本来の姿がこれだもの。地下の賭博街。

上の道端で倒れている人はこれにつき込んでどうしようも無くなつた人たちよ」

「なぐるほどね。確かに俺達とは関係ない場所だわ」

サラは周りの賭博場に目もくれずにどんどん奥へと進んでいく。

そして、着いた先は大きなドーム。

中に入るとそこには割れんばかりの歓声が聞こえてくる。

中央には砂で敷き詰められた丸いリングが存在していた。

そして、それを囲むように満員の観客がいた。

そんな熱気に包まれた場所では否が応でも血が騒ぐ。

「なあサラ、ここと依頼人の仕事と何の関係があるんだよ？」

「依頼人のカミュさんは実は、ここで王者として4年間君臨していたのよ」

「ええっ！？ ほ、ほんとうですかカミュさん！」

サラの言葉に思わず驚くアイリーン。

そして、そんなサラの自己紹介に照れるカミュ。

「ええ。確かに私は以前はここで王者として君臨していました。けれど、それから膝を故障してやむを得ず引退したんです」

「そりやまた残念」

「……ええ。ですが、本当に残念なのは友人と戦えなかった事です」
「友人と戦う？」

「子供の頃、私達は約束したのです。もし、私達が大きくなったらこの闘技場の決勝戦で

優勝を賭けて観客の心に残るような戦いをしよう」と

名残惜しそうに試合を観戦するカミュ。

彼自身はまだ戦っていたいと思っっているだろう、だが、彼の足の容態はそれを許してくれない。

「決勝戦って……これってトーナメント方式なのか？」

「ええ。一日5人ほどのエントリーで争われる小さな大会形式です」

「しかし、これとアンタの約束と何の関係があるんだ？　まるっき

り関係ないように

思えるが？」

そう、あくまでカミュの依頼は「友人を救って欲しい」ここで彼らの関係や経緯を

知った所で依頼とは関係なさそうに思われる。

だからクサナギは訊ねた。

「……それはもうすぐわかります」

「あ？」

カミュの発言に戸惑いを感じるクサナギ。

だが、彼の言葉の意味は直ぐに分かる事になる。

突然の大きな歓声。

どうやら試合の決着がついたようだ。

一人は地面にひれ伏し、もう一人は高々と拳を天に突き上げ勝利をアピールしていた。

これがどうやら決勝戦だったらしく、トロフィーらしきものと、紙袋を持った係りの者が出てきていた。

それを受け取る勝者。本来ならこれで終りを告げる。

だがそれは、たった一人の男が乱入してきた事で妨げられる事になる。

選手がリングへと上がる入り口から一人の男が入ってくる。

男は嘴くちばしのような仮面をつけていた。

仮面には覗き穴と思われる箇所もなく、あれでは何も見えないはず。

しかし、それを男は気にした様子はない。

体格は恐ろしいほど磨き上げられた筋肉の鎧。

上半身は裸で、その体つきは無駄な贅肉など見当たらない。

その男を見るや否や再び割れんばかりの歓声が鳴り響く。

だが、それはほとんどはいつて来た男に対しての罵声であった。

「な、なんだあいつは？」

不気味な仮面の男を見て驚くクサナギ。

一目見て分かるのだらう、彼は只者では無い、”バケモノ”だと。

「あれが……私の友人です」

「！？　はあ！？　あれがアンタの友人だと！？」

「はい。彼は毎日試合の優勝者と戦う為に現れる存在。そんな彼を他の方々は幽霊ゴーストと呼んでいます」

カミュと話している間にあのゴーストと優勝者が戦いを始める。優勝者は先程の戦いの疲れを知らないかのような機敏な動きを見せる。

それに対して全くその場を動こうとしないゴースト。

あっという間にゴーストの死角、背後へと回りこむ優勝者。

そして、鋭くキレのある拳をゴーストの後頭部めがけて放つ。

本来のルールであれば、この行為は反則である。

だが、これは試合ではない。

その為、ルールなど存在しないただの殴り合いなのだ。

優勝者の鋭い拳がゴーストの後頭部を捉える寸前。

ゴーストは優勝者の方を見る事無く、首を前に倒してそれを難なくかわす。

しかし、優勝者は間髪いれず連続して拳を放つ。

だが、ここで驚くべき事が起こる。

ゴーストは優勝者の方を見る事無くまるで後ろに目でもついてるかのように

それを全てかわし続けたのだ。

あまりの異常な光景に皆言葉が出ていなかった。

優勝者の顔がみるみる青ざめていく。

そこで初めて気づいたのだろう、自分には手におえぬ怪物であることに。

そして、ゴーストはゆっくりと優勝者のほうに振り返ると同時に、何かハンマーで叩いたようなつぶれた音が響く。

それがなんなのか理解するのに数秒。

それはゴーストが優勝者の顔面を拳で貫いた音であった。

あまりにありえぬ出来事。

そして、ゴーストは用が済んだのか、再び入り口から帰っていった。

皆の時間が動き出したのはこの出来事から数分後だった。

第三章『交わした約束』 4

クサナギ達はあの惨劇を目の辺りにした後、カミユの家へと戻ってきていた。

皆重苦しい空気に包まれていた。

「……大体の内容は理解できたが、本当にお前の持ってくる依頼というのは

最悪だな！」

くそつ、と苛立ちを隠せないクサナギ。

彼を救って欲しい、それは彼を倒せと同義語なのだ。

「他に方法は無かったのか？」

「あればとづくにやってるわよ。遠くから銃で狙ったり、武器で倒そうともしただけ

全員返り討ち」

「ヴァンファールとかいうのには頼らなかったのか？」

「駄目よ、もし頼って倒したとしてもその後が大変よ。賭博場なんかご法度だし、

直ぐに潰されてみんな暴動にでるわよ？」

「それじゃあ、結局」

「そつ、あなた頼み」

手を合わせてお願いをするサラ。

頭を掻きむしり、見るからに不満そうなクサナギ。

「ナギも最初は結構のり気だったじゃない」

「こんな依頼だって分かってたら最初からやらない。しかし、本当

にあれが友人なのか！？

「あ、バケモノだぞ！」

「ええ、確かに彼は私の友人です」

「根拠は！？ 証拠は！？ もしかしたら別人かもしれないぞ？」

「というか、別人だろ！」

「証拠はありません。しかし、彼と分かるものが2つほどあります」

「本当かよ？」

「はい。一つは彼は必ず決勝戦で勝った相手と戦う事です。他の相手には手をつけません」

「……それはあんたの言う約束と同じだからって事か？」

「はい。そしてもう一つ、彼は、小さく同じ言葉を呟いているのです」

「同じ言葉？」

「彼はこう呟いていました。「約束……果たす」と、それを何度も何度も

彼をつき動かしているのはあの時の約束なのでしょう」

カミュは目に涙を浮かべながら語る。

本来なら自分が約束を果たし、それで終わるはずだった。

だが、それは運命のいたずらとも思える故障により果たす事ができなくなっていた。

「お願いですクサナギさん！ 彼を！ 友人を！ どうか救ってください！

お礼はさせていただきます！ どうか、どうか……」

カミュは泣きながらクサナギにすがりつく。

一刻も友人を解放してやりたい一心の思いで。

クサナギは頭を掻き、困った様子。

「しかしだな……」

「ナギ、あなたぐらいなのよ？ あんなバケモノと渡り合える同じバケモノは」

「おいおい、俺もバケモノ扱いかよ？」

「あのバケモノは何らかの方法で相手の攻撃を見切っている。

そして、あなたもその『眼』で相手の攻撃を見切れるんだし」

「えっ？ サラさん、クサナギの眼って何かあるんですか？」

「ええ。彼の眼は『レギス』エウス『クルス（全てを司る眼）』と言って、

眼の神経を伝って脳に直接干渉し、知りたい情報を瞬時にくれる眼。

例えば、相手の筋肉の動きやそれに伴う予備動作から相手の動きを『予測』する

事も可能で……」

「おいサラ！ 余計な事いうな！」

「えゝ？ 別にいいじゃない？」

サラからもたらされる情報にただただ驚くだけのアイリーン。

それなら以前の銃弾を回避していたクサナギの行動も納得がいく。

彼は弾丸の軌道が本当に『視えていた』のだろう。

そして、以前のトニーのあの行動も全てお見通しだったわけだ。

「それって、未来が見えているってこと？」

「勘違いするなアイちゃん、未来なんてものは「無い」未来なんてものは作るものだ。

あくまで「予測」だ。ただ、その確率は100%に近いだけという事だ」

「それでも充分じゃない。それだったらあの人倒すのも簡単……」

「なわけ無いだろ。幾ら予測できたとしてもそれを回避できるかど

うかは別問題」

「あ、成る程」

「でもナギ？ あなた達は結局IDカードが欲しいんだから選択肢は無いとおもうんだけどな」

「ちっ、分かったよ！ やりゃあいいんだろ！？ だがな、一つ条件がある」

クサナギは真剣な表情でカミユのほうを見る。

その真剣な眼差しに思わず身構えるカミユ。

そして、クサナギの口から出た言葉は。

「美味しい飯をくれ。もう、この不味い飯はこりこりだ」

第三章『交わした約束』 5

そして、次の日になった。

クサナギは大会にエントリーをして、個室の控え室にて待機していた。

しかし、ここで一抹の不安が残っていた。

「ちょっとあんた、銃の腕前はすごいのは分かってるけど……今回は「素手」なのに

大丈夫なの!？」

アイリーンは心配そうにクサナギに訊ねる。

そう。今回はあくまで格闘技。

当然の如く銃など使えるわけも無い。

「大丈夫、大丈夫。アイちゃんが俺を心配になる気持ちも分かるけど信用して欲しいな」

「あ、あんたね!」

「ナギ、死なないでね? 私を一人置いていくなんて許さないんだから」

「! さ、サラさん!？」

「そのセリフで一体何人の男を騙してきたんだ?」

「あら、ばれた?」

おもしろくないわね、とフウとため息をつくサラ。

そんなやり取りを見てドキドキしているアイリーン。

「まあ、どうせ勝つのはナギだろうし、その所は心配してないわ」「はいはい。そのご期待にできるだけ応えましょうかね」

そして、係りの者がクサナギに時間を知らせに来る。

クサナギは係りの者に連れられて控え室を後にしようとする。

「く、クサナギ！」

「ん？ どしたアイちゃん？」

「その……頑張つて！ 負けたら承知しないんだからね！」

その言葉に僅かに笑うと、手をあげて応える。

そして、アイリーンたちは観客席へと向かう。

観客席に行くと、一人ユイが席をとって待っていた。

「ごめんね、ユイちゃん。一人で寂しかった？」

「大丈夫、それよりクサナギどうだった？」

「いつもどおりよ、全く、あいつに緊張感ってないのかしら？」

呆れた表情のアイリーン。

ふと、ユイを見るとなにやら紙を握っているのに気づく。

「なにそれ？ ユイちゃん」

「……賭博券。クサナギが勝つと、5倍らしいから」

グツと握り締めるユイ。

その様子を見て困った表情を見せるアイリーン。

「えっと……幾らかけたの？ ユイちゃん」

「全財産」

「えっ！？ ど、どうするのよあいつが負けたら！？」

「大丈夫、クサナギは負けないから。それにもし負けたら……」
「負けたら？」

「私が……殺す」

その感情がこもった声からはユイは本気だとアイリーンは察する。
密かに負けないようにと、祈るアイリーン。

「大丈夫よ、ナギは必ず勝つわ」

「サラさん信用してるんですね、クサナギのこと」

「ええ。一応ナギとは長い付き合いで分かるわ、あの人の強さは」

「……サラさん、あいつとは何も無いんですか？」

「と言うと、男女の関係でかしら？」

その言葉に僅かに頬を赤らめ、こくりと頷く。

サラはそんなアイリーンの様子にすこしだけ微笑む。

「そうね。男女の関係では何もないわ、残念だけど」

「ほ、本当なんですか？」

「ええ。そんなに気になるの？」

「だ、だって私より全然サラさんのほうが綺麗だし、もしかしてサラさんはあいつの事

嫌いなんですか？」

「好きよ」

アイリーンの問いに即答で答えるサラ。

真剣な表情がそれが本気だという事も分かる。

「そ、それじゃあどうして？」

「まあ、彼が鈍いのが一番で、私も彼に素直になれないところね」

「えっ？」

「怖いのも彼に嫌われるのが。それならこのままでいいかって…

…」

「サラさん……」

「さっ、そういう話はもうやめにしましょう。そろそろナギの出番だし」

ドラを叩く大きな音が場内に響き渡る。

そして、それに呼応するかのよう到大歓声が響き渡る。

『それでは、これより試合を開始いたします！ 選手入場！』

場内アナウンスが始まり、二つの正反対の入り口から二人の男が入ってくる。

一人はやさ男で背が高く、お決まりのサングラスをかけてリングに出てくるクサナギ。

もう一人は2倍ほどの身長で上半身が裸で隆々とした筋肉を見せ付けるスキンヘッドの男。

見た感じでは明らかにスキンヘッドの勝ちであろう。

故に、2倍と5倍の破格の換金率。

「ぐふふふ……お前さんも運が悪いな？ この「アイアン」の異名をとる

ジョージ・ルークスと相手とは」

スキンヘッドの男はニヤニヤと余裕の笑みを浮かべる。

自分の体格と比べてあまりに細いクサナギを格下の相手と判断した為だ。

「アイアイ？」

「アイアンだ！ 貴様なんぞ試合が始まって10秒で片付けてやるわ！」

このリングに場外はない。

ルールは金的など危険行為は禁止で後は至ってシンプル。

「相手を倒せば勝ち」

そして、試合の開始を告げるドラが鳴り響く。

「死ねえー！ このキザ男がー！」

開始と同時にスキンヘッドの巨体が突っ込んでくる。

この狭いリングでは逃げ場が無い為、この戦法は非常に有効だ。

そして、クサナギの体をわしづかみにしようと左右から巨大な手が襲い掛かる。

しかし、クサナギはそんな事とはつくに「視えている」

スキンヘッドの両手が空を切る。

「ど、どこだ!？」

左右を見渡すスキンヘッド。

しかし、クサナギはどこにも見当たらない。

それもその筈、彼は両手が迫り来る時に男の懐に入る事で回避していたのだ。

そして、間抜けにも周りを見渡すスキンヘッドの男の顎めがけて拳を放った。

それは空気を切り裂くような鋭い一撃。

相手も予想だにしていなかった攻撃の為、そのダメージは計り知れなかった。

スキンヘッドの顔がのけぞり、バク転をするように巨体が宙に浮く。そのまま大の字にリングに沈む。

それで試合続行は不可能と判断したレフェリーが勝者の名前を告げた。

「勝者！ クサナギ！」

あまりに華麗で、予想できなかった試合展開に場内は驚きと興奮の
声に満ちた。

そして、それに応えるように拳を突き上げるクサナギ。

「すごい……」

驚きの声を上げるアイリーン。

そして、その隣でグツと賭博券を握り締めるユイがいた。

「だから言ったでしょ？ ナギは勝つって」

「サラさん」

「だって勝ってくれないと私の30万が無くなっちゃうところだっ
たもの」

「……サラさんも賭けてたんですか」

「ええ。これで、あの人の弾薬代はチャラね」

上機嫌で話すサラ。

そして、この後もクサナギは勝ち、ついに問題の決勝戦へと辿り着
く。

個室で待機しているクサナギ達に、思わぬ客が来訪する。

「あれ？ カミュさん？ どうしたんですか？」

アイリーンがカミュの来訪に驚く。

カミュは車椅子をたくみに操り、クサナギの待機している個室には
いつて来た。

「いいいよですね……クサナギさん」

「ああ、だけど、その前に一人勝たないと無理だな」

「ええ。ですが、あなたなら大丈夫でしょう。それよりもその後が……」

「分かってるよ」

決勝戦は前菜のようなもの。

メインディッシュはその後のバケモノだ。

カミユも心配でたまらないのだろう、だからこそこうやって微力ながらも

応援に駆けつけたのだろう。

「なあ、カミユ」

「ハイ、なんでしょうか？」

「あんた言ったよな、あいつを「救ってやってくれ」と」

「……はい」

「二言は……ないな？」

「はい」

クサナギの執拗な確認に戸惑いを感じながらも答えるカミユ。

そして、クサナギから思わぬ提案が出される。

「カミユ、あんたは観客席に行かずにリングの近くで見てろ」

「えっ？」

「ちよつと、そんな事して大丈夫なの！？　もし、あいつがカミユさんを……」

「そりゃ無いだろ、あくまであいつの目的は決勝戦の勝者と対決だからな。」

「あんたは近くで見届ける義務がある、違うか？」
「……おっしゃるとおりです」

そして、係りの者がクサナギを呼びに来る。
遂に決着の時が来た。

先程とはうって変わって重い足取りのクサナギ。
そんなクサナギを心配そうに見つめるアイリーン達。

「クサナギ！」

「ん？」

「あんな奴やっつけちゃって！」

ビツと拳をクサナギに向けるアイリーン。

そんな仕草におもわずクサナギから笑いが漏れる。

「ああ。ほんじゃま、幽霊退治と行きますか」

第三章『交わした約束』 6

そして、初めの試合と同じように手を振ってその場を後にする。入り口を通り、リングへと足を運ぶクサナギ。

観客の熱気は決勝もあつてか、一段と熱気が上がる。

リングの上で相手を待つクサナギ。

入り口の隅で覗くカミュとアイリーン達。

そして、反対側の入り口から対戦相手が姿を現す……が。

「おいおい……本気^{マシ}かよ？」

その光景にクサナギは啞然。

入り口から出てきたのは、なんとあの仮面をつけたカミュの友人だった。

手には、本来クサナギと戦う予定だった対戦者の無残な姿があった。

「まさか、いきなりメインディッシュとはな」

幽霊の予想外の行動に予定が狂う。

しかし、これはクサナギにとっては嬉しい誤算だった。

なにしろ覚悟していた無駄な一戦を省けたのだからだ。

幽霊は掴んでいた対戦者を手から離す。

そして、軽やかにリングに舞い降りた。クサナギを葬る為に。

対峙する二人のバケモノ。

「おい、聞こえてるんだろ！ カミュの友人さんよ！」

クサナギは幽霊に問いかける。

しかし、何の反応も示さない幽霊。

「こんな馬鹿げた試合を何時まで続ける気だ！ お前の本当に戦いたい相手は

もういないんだよ」

そう、彼が本当に戦いたい相手は既にいない。

それでも彼が戦う意味が分からなかった。

幽霊はクサナギの言葉を意に介するようすもなく、戦う構えをとる。

「『フェイ』！ 俺だ！ カミュだ！」

それを見かねたカミュが大声で叫ぶ。

「残念だけど俺はお前との約束を守れなかった。もうこれ以上戦うのは

やめてくれ！ 俺はここにいるんだから！」

しかし、カミュの声すらも聞こえていない様子。
まるで”存在すら知らないかのように”

「どうやら、向こうは何が何でもやりたいらしいな」

避けれるものなら避けたかった。

これから始まるものは試合などという甘いものではない、殺し合いだ。

クサナギも構えをとる。

すこしづつ二人の間の空気が張り詰めていく。

息を整え、相手の出方を見る。

二人のただならぬ気配に観衆も思わず息を呑む。

そして、時が動き出す。

「ハアアアアア！」

掛け声と共に勢い良く幽霊の方へクサナギが駆ける。

そして、その勢いを殺さずに閃光のような右の拳を顔面めがけて放つ。

しかし、以前観客席で見たときと同じように最小限の動きで幽霊はそれをかわす。

構わずクサナギはボディ、顔面と上下に打ち分けてコンビネーションを放つ。

どちらも回避困難な攻撃。

だが、幽霊の名にふさわしい滑らかな動きでこれをかわす……が、クサナギはそんな事は分かっていた。

その為ボディ、顔面と避けられた際に相手の腕を掴む。

互いに背中合わせの状態になり、そのまま相手を投げようとするのだが。

「なっ！？」

できない。

相手の片腕を両手で持ち、そのまま背負い投げることが出来ない。それどころか逆に投げるはずのクサナギの体が浮いている。

そしてそのままあろう事か腕一本で逆に投げられる。

投げられている途中で咄嗟に掴んでいる両手を離す。

だが、離れたのはまずかった。

クサナギの体は腕一本で投げられたとは思えぬ程勢い良く真横に飛んでいく。

このままでは観客席に衝突する。

必死に空中で体を捻ることで何とかリング内に着地する事が出来た。そして、顔を幽霊の方に向けると。

眼前にそびえる幽霊の姿があった。

そして、幽霊の手に力がこもるのが分かる。

以前顔面を貫いたあの凶器だ。

ゆつくりと、今度はクサナギの顔面めがけてあの凶器が炸裂しようとする。

放たれれば最後。

人に為す術は無い。

だが忘れてはならない、彼もまた人の姿をしたバケモノ。

彼の眼は『レギスⅡエウスⅡクルス（全てを司る眼）』相手の行動を予測することができる目。

だが、それはあくまで数ある中の一つ有能力。

予測ができるのなら、それを回避する方法も分かるのだ！

終りを告げる凶器が放たれる。

しかし、突然幽霊の体が崩れ落ちる。

クサナギは幽霊の凶器よりも早く、相手の足を刈る事でそれを阻止したのだ。

態勢が崩れて放たれた凶器は本来の威力が出るはずも無い。

そして、そんな状態で放てばおのずと隙だらけになる。

膝が崩れた幽霊に対して、クサナギは遠慮なしで顔面に回し蹴りを放つ。

無論、殺す勢いだ。

派手な金属音と共に幽霊の首がくの字に曲がり、5 m程横に飛び、勢い良く転がり

倒れこんだ。

その光景に観客は熱狂。

ついにあの幽霊を倒す強者が現れたと、称える様に。皆が喜ぶ中、一人心配そうに幽霊を見つめるカミュ。そして、駆け寄ろうとしたその時だった。

「……参ったな、あれでも結構本気だったんだぞ？」

ボソリと苦笑いをしながら呟くクサナギ。

幽霊は何事も無かったかの様にムクリと立ち上がる。

それを見て構えをとるクサナギだったが。

幽霊の顔を見ると、仮面にヒビが入っていた。

そして、それは自然と大きくなり、遂には割れてしまった。その時、クサナギ達は全てを知った。

「なっ!？」

その姿を見てある者は目を瞑り、またある者は吐き気を促す。

彼の眼は瞳孔が開きっぱなしで、焦点がまるで合っていない。

彼は眼が見えていなかった。

しかし、それはあの仮面の時点である程度分かっていた。

覗き穴と思わしきものが見当たらない為、眼はあまり意味をなしていない。

つまり必要ないと考えられたからだ。

だが……。

「そういうことかよ……俺達の声を聞こえない振りをしていたわけじゃなくて、

まさか本当に”聞こえなかった”とはな」

彼の本来耳がある部分。

そこには怪しげなヘッドフォンらしき機械がついていた。

そしてそこから管くだのような物が背中に続いており背骨の辺りに挿入されていた。

あまりに異常な光景。

「フェイ！ どうして、なんでそこまでして！」

「カミュ、無駄だ」

「クサナギさん！？」

「見れば分かるだろ、あいつは眼はおるか耳も機能してない。あいつが何故

お前と戦わなかったか、なぜ決勝戦の相手しか戦わなかったのかわかっただろ」

「しかし！ フェイは一体どうやって戦っているんですか！？」

そう、彼は眼も耳も無い。

あれではここに来る事も、決勝戦と分かる事も無理であろう。

「これはあくまで俺の予想だが、あいつは「触覚」で察知しているんじゃないか？」

「触覚？」

「ああ。動物とかでも居るだろ？ 眼も耳も無いのに位置を探るところができるのが

まあ、それは「触角」だがな」

「そんな事可能なんだろうか？」

「さあな。だが、あれだけの状態を見ると、よほどあんと戦ったのだらうな

死して尚約束を果たそうとする……か」

そう、彼は死んでいる。

意思が無く、相手が誰であろうと戦い続け、果たせぬ約束を果たす

為に。

そして、彼自身も約束が果たせたかどうか分からない。

ただむさぼり続ける殺人機械キラマシーン

そんな彼を見たクサナギはある決断をカミュに打ち明ける。

「カミュ、俺はあいつを殺すぞ」

「！？ なっ！ は、話が違います！ 彼を救ってくれと私は……」

「救うさ。終りの無い約束からあいつを」

「やめてください！ あれは、あれはかけがえの無い……友人なんです」

涙ながらに擦れた声で語るカミュ。

自分でもどうすればいいかわからない。

相手はもう顔がわからない、言葉も聞こえない。

そんな彼を救う方法があるのか？

「覚悟を決めるカミュ。もし本当にあいつを救う気があるのなら、
今ここで

呪縛から解き放すべきだ」

クサナギはゴーストに近づいていく。

そして、ゴーストもまた、クサナギに近づいていく。

両者リング中央の所でお互いたちつくす。

「なあ、ゴースト、アンタにとってこの約束はそこまでするほどの
ものだったのか？」

「……」

ゴーストはクサナギの質問に答える事はしない。

ただただ、焦点のあっていない目がクサナギを見つめる。

そして、クサナギはため息を一度つくと。

「アンタみたいな奴は嫌いじゃないぜ。……けどな、そろそろいいだろ？」

もうゆっくり休めよ」

そういつて構えをとるクサナギ。

再び対峙する二人。

皆、この戦いに息を吞んで見守る。

そう、もはや賭けやショーなどではなく、純粹にこの戦いを見届けたいとここに居る

観客全員がそう思っていた。

そして、二人の拳が再度交わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0215d/>

クサナギ

2010年10月13日17時19分発行